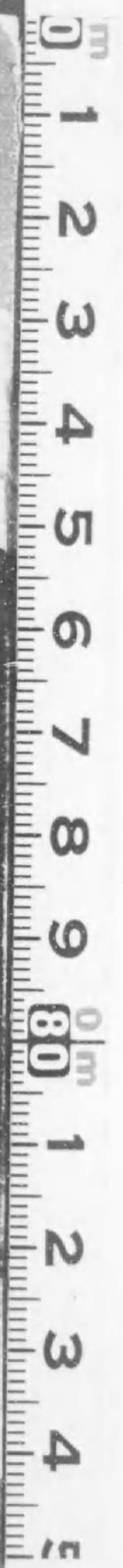


特273

437

各人
應對
振盪



始



特 273
437



對
振
り

大正
10 4.15
内交

各
人
調
應
武
不



大 五
交 内



序

東に鋸峯のこぎり、西には彌彦、あいを流るゝ信濃の河に、かけた長橋末あが／＼と、榮は廣がる大長岡に、住めば都の振袖模様、黄菊白菊色様々に、一人一色十人十色、杉の木立は素直に延びて、雲にとゞいて詩とも成ろう、松は曲つて地に這へばこそ、イー杖振りだと讃められもしよう、鬼角浮世に出でたるものは、非情の草木も有情のものも、一つ／＼に異なればこそ、色も香もある味もある、其處に社會の百花が咲く……、未だ若木の才知郎さんは、風も刈羽の柏崎生れ、色は白雪濡羽の髪を、長く延じた丹治郎男、歌も作れば俳句も捻る、戀の小説惚の美文、政治經濟産業あどろ、四角四面の文字さへ綴る、殊に得意は人物評よ、硬い理屈もいと柔和と、書いた「各人應對振り」が、今度此度單行本と、あつ

て浮世に生れて出でる、人の風見て我姿直せ、他の應對我身の鏡、玉を磨けよ他山の石で
箸は二本でペン一本の、所詮かゝるぬ貪乏記者が、瘦せ腕一つで發行たる小冊子、讀むと
讀まぬは勝手だけれど、是非に一冊購はれよと、チョンと序幕の仕出しに出たる、ヒゲの
男があら／＼可祝

緊張した空氣を滅茶／＼にした春風が生温く吹く三十一日の午後一時頃、破れ障子の窓にて

幻囚庵蒼龍

出版の挨拶

私は微力で何も出来ぬ、けれども微力であるからと云つて消極的か生温い生活を營む事は私の良心に背く、私は私の良心の命するが儘猪突的に進み度い、だから他者が「下らぬものを好く纏める氣にあつたものだ」と嗤はうが嘲けらうがそんな事には意を止めぬ

私は自ら「下らぬもの」と云ふ事は肯定する、去れど私の良心は「纏めて見よ」と命令を下した、夫れが今回此舉に及んだのである。書中、収めたる人々は多く日刊當時職務上訪問したのである。其の時、時に於て應對の巧拙と云ふ事を考へさせられた、夫れ故談雜の片々を交は、瞬間の感じを率直に表現して見たのである。私の頭といふ目の荒い篩を通じたものであるから當然文字の

粗笨は免れぬ、尙ほ又修正しあければならぬ箇所も鮮くあいで思つて居るが夫れが明瞭しあいは遺憾だ。そして此の書を公にする意義が奈邊にあるか自問自答して見たが當初の意義より外にかい、當初の意義とは即ち應對の態度を叙して、客扱的活學問の教科に最も適切なる資料を供さんと云ふにある、果して斯くの如き意義が見出されるか否か私は今云ふを欲せぬが兎に角本書裝幀者洋書家坪井政太郎氏特に序を寄せられし伊藤蒼龍氏其他出版に際し多大なる同情と指導とを賜はり、此の小さき私志を成さしめられたる後援者諸彦に對し、謹んで感謝の意を表します。

大正十年四月

長岡商報編輯局に於て
著者

識

各人應對振り目次

瀧澤 義一君	一	今井種次郎君	二一
皆川四市郎君	三	岩崎與三郎君	二三
徳間源九郎君	五	久保村 稠君	二五
小出 廣作君	七	小林 信次君	二七
結城重五郎君	九	本田 キミ君	二九
鈴木豊次郎君	一一	山際 津一君	三一
金井 晟吉君	一三	田村 寅吉君	三三
若月 久作君	一五	内山 由藏君	三五
小山榮次郎君	一七	林 貞次郎君	三七
米屋 幸吉君	一九	小林 銀汀君	三九

戶田慶八郎君	四一
伊狩隆太郎君	四三
長尾玉圃君	四五
須藤善一郎君	四七
矢野冒齋君	四九
笠井幾太郎君	五一
反町新作君	五三
谷六郎右衛門君	五五
高橋善吉君	五七
久保正司君	五九
星野右吉君	六一
山口三五郎君	六三

大平八十吉君	六五
小島忠三君	六七
布川卯吉君	六九
小林文平君	七一
高橋彖治君	七三
江口恒太郎君	七五
神山敬太郎君	七七
野口昌作君	七九
松谷清松君	八一
穴倉鋼助君	八三
櫻井金作君	八五
田中正士君	八七

小黑為策君	八九
入江敏君	九一
白濱喜八君	九三
奧村修次君	九五
須藤武八郎君	九七
大橋新治郎君	九九
加瀬義雄君	〇一
吉田吉三郎君	〇三
佐藤平次郎君	〇五
渡邊祐吉君	〇七
佐野幸助君	〇九
清水儀八君	一一

岸祐一郎君	一一三
山田武雄君	一一五
海津徳七君	一一七
小島清吉君	一一九
下田勇松君	一二一
星野太廣君	一二三
深澤勝太郎君	一二五
渡邊兼太郎君	一二七
大森正雄君	一二九
玉垣清助君	一三一
小林忠三郎君	一三三
一辰美團香緒	一三五

星 秀助君	一三七
小林 治良君	一三九
恩田 長七君	一四一
岡本徳太郎君	一四三
小林 喜助君	一四五
南 與吉君	一四七

製袋業 瀧澤義市君

長岡市城内町
電話二二二番
連接三五四番

當主伊太郎氏は大阪方面へ封筒の販賣に出張して不在の事、其の留守を頼まれた若主人義市さんに會ふ、帳場の壁に貼られた「時を貴びなさい」に眼の着いに記者は「時間勵行會の會員です」と云へば君は只だ笑つて何とも答ひない、親父さんの頭も新しいには相違ないが會社の事務所的に椅子に腰掛けて帳簿を調べる仕掛けに改造したのは多分若主人たる君の差し針であらう、矛盾だと云へば謂はれぬてもないが足袋の上にスリッパを突掛けて椅子に恁れた君は机に片腕を載せ一寸カメラに納める時のやうな粹な格恰を崩さず記者に對す

長岡市の家庭内職としては何があるだらう？の疑問を抱いたのは久しい以前だ、場末の町を通つても麻繼ぎ機を踏む音を聞いた事もなければ見た事もない、去りとして茶卓の上でパテンもして居ない、偶々千手町の或る家で十二三才の少女が二三人状袋を貼つて居るのを見た、實は夫れで屑が散らかつて汚い麻繼ぎより又パテンより容易に出來て有利な状

袋貼りと言ふ内職があるのであると直覺した次第だ

扱て其の本家本元が何處にあるか分らない、小田原提灯の加く町をブラ付いて居る内に「製袋部」の看板が眼に着いた、久しい以前から内職に就て聞かうと思つて居た宿望が、目的が偶然に達する事が出来るかと思ひば腰掛けた椅子がガタ／＼震動する位歡喜に全身が揺れた

君は内職としてはバテンあり麻繼ぎありて未だ甚だ微々たるものですが近來非常に貼る者がありますと斯う云つてアゴを引いた、再び口を開く準備として息を呑むとアゴを引くものだ、之れは説明するまでもない、扱て其の次に何を齎らすか耳を澄すと君は垢の付いた手で貼られては不良品とあるのですから綺麗を白魚のやうな手で貼つて貰ひたいのだが卻々理想通りの状態貼りはない、處が此頃或る女學生が勉強の餘暇を利用して貼りたいたからと來た、東京から苦學生おどがあつて左程珍しくないが田舎では一寸氣を惹く、或は涙のローマンスがあるのかも知れないが只だ感心する許りだ……と腹藏があかつた

やちく事
割烹皆川四市郎君

長岡市文治町
電話九〇九番

いしごろ館の前から右折し少し行くと粹あ（やちく）と云ふ小料理屋がある、其處の主人が君だ、其の風流に接した處が左程物事に趣味のありさうもないが卻々どうしてどうして種々の物に興味を有つて居る、夫れ丈け話せる男である

牡丹雪のボタリ／＼と降る十四日の二時半頃ブラリと遊びに寄ると君は自ら入口まで出て「寄らじやい」と言へ乍ら手を揉んで居る、記者は又無遠慮にツカ／＼と上つて君の居間に這入ると前の車屋さんが先來だ、三人鼎座して先づ茶呑み話に耽ける、其の間記者の眼に映じたのは弓術大會の賞状だ、大弓もた遣りですねと云へば「弓は之れでも」と聊か自慢らしい、成程國幣中社彌彦神社から優勝旗一旒の賞状も出て居る

話は一轉して今度は將棋だ將棋は段をた持ちですかと問へば四段「油断」だと云ふ、其はと問へば之れも四段「油断」だと云ふ、未だ趣味のあるものがある事を知つて居るから聽か

うと思つたが將棋と圍碁の話が斷れず夫れから夫れへと進轉して遂ひに將棋は胡座を掻いて打つが碁は座つて圍む、要するに碁盤は高いから將棋盤は低いから其處に斯く相違があるのであらうが本來から兩方正座して打つものだけに打ち切り今度は文治青年會新年宴會の福引に移つた

兎に角御題に因んだものが無くてはあらぬと考へた末「社頭の曉」として赤砂糖を出す事にした、曰く砂糖「社頭」の曉だと、牢強附會であるが却々利いて居る處があるから面白い、最後に或る人が今年は菜の出來かい年だと云ふから何故かと問ふと酉年だから鶏が皆喰つて了ふのであると大笑ひさせた

株式 德間源九郎君

長岡市東千手町
電話六七三番

長岡は株式の盛んな所丈け株屋さんが多く眼に付く、偶々用件があつて東千手町方面へ行くと神谷病院の前に「公債株式現物賣買」と染め抜いた紺の香匂ふ眞新しい暖簾が下つて居るので此處にも株屋さんが有るゝアと思つたのが君の店だ、或る日立寄ると君は生憎不在との事、何處へ行かれましたと聽けば淑やかか妻君は「場所へ行きました」と云ふ、場所？扱て何處の事だらうと考へて見たら夫れは取引所の事であつた

店には丁度柏崎の人が來て居たので其人と二三話を交はして居ると間もなく君は歸つて來た、何度も會つて知つて居るので挨拶も極く單純なもの「イヤ」で済す、此の「イヤ」の一語が親しい友と途上で逢つた時のやうなアクセントを有つて居るので好感を唆つた

君は刈羽郡西中通村春日の出身、此の長岡へ來たのは約四年前であるさうだ、來岡の目的は同郡出身の小黑株式店へ入る所存であつたが運が強いのが買へば當る、買へば當るの

頓々拍子で忽ち金を鉅攫し獨立株式店を開業し今日では信用ある店の一に數ねられて居る君も赤手空拳で遣つて來たのであるから其の當時は「どうせ斯うありや一六勝負、度胸定めて運試し」の寸法で此の株に、米に手を染めたのであらう、處が大地打つ槌は外れても自分の見込みは外れず十の内は七分當り、本當に儲けたのであらうかと思ふ位は生優しいこと、マサカ夢ではいかと腿の肉をつねると云ふ騒ぎ、つねつて見れば矢張り痛い、夢でもかいで物語りの一つとあつて居るとの事である

店の者が電話でさう云はないでとか何とかゴタノ、言つて面ひをして居ると傍らに聽えて居た君は面倒臭さうな顔をして「厭やなら小便して呉れと云へ給い、ソレでドン／＼と賣れるのだから……」と言ひ乍ら受話機を取つて「厭やならヤメて呉れ、此方は無理に賣らんでも好いのだから」と突掛る、すると先方では此の言葉に壁々してと云ふより寧ろ力を得て其儘買つて置いたらしい、君は電話が切れると「三十や四十の株でブル／＼ふるえて居るやうだから駄目なのだ、本當にケチな野郎だ」と記者に對し聽かせるとなくつぶやく、此の言葉が猛虎の嘯く如く聽覺に響いた

買へば當る、賣れば當ると云ふ事で思ひ付いたが店に上げられてある「蕪」に「槌」の押繪の額は其の意を寓して居る

紙店小出廣作君

長岡市神田三之町
電話九六九番

同店は左方が製袋所とあり右方が紙販賣所とあつて居る、二三人の店員が御得意先へ發送する荷送り最中、蕪や繩で廣い店先は通り歩きもあらぬ位だ、其の中を漸く通つて行くと君は十呂盤をバチ／＼弾き乍ら「此の位から賣つても好う御座います」と對手に桁の珠を示して商ひ中だ、記者は商ひの妨げを懼れて縁に腰掛けた儘製袋部の方を眺めて居ると「まア此方らへ」と座蒲團を勧める

君は「社の景氣はどうです」と云ふから「お蔭様で」と云ふと「夫れは結構です」とお世辭を振り撒く、お客とは先づ商談が調つたらしく今度雜誌に移る、矢張り商賣と云ふものは争はれぬもの、雜誌も紙から始まり夫れから最後に帝國議會だ、お客だと云ふ人が正月議會を傍聴したが國家の選良丈けあつて却々雄辯家許り、本當に立板に水を流すが如く滔々と辯ずるのに舌を捲いて來た云へば君も近い内に行つて見たいと花の都であく日比谷の蛙に憧憬れて、時間も金もかい記者を羨やましがらせる事甚大、ナニ官報の速記録を見れ

ば議會を傍聴したと同じ事だと思ひ漸く羨望の念を消す、君は記者の斯うした胸中を知らず盛んに議會傍聴々々々々を口に出す

其の内に記者の視線を惹いたものが一つある、夫れは店の柱に貼られてある短冊だ、句は忘れたが確か蕪村の作のやうである、何んと云ふ書家が書いたものですと問へば商人の書家が悪戯らしたのだと云ふ、けれども筆勢は却々立派なものである、斯うした短冊を貼つて見て楽しんで居る君の風流は今日始めて知つた

長岡鐵工所へ行く途中なので間違々々して居ると同鐵工所が退けて仕舞ふ、倉皇として辭さんとすれば「モウ一杯如何です」と茶を注ぎ通り蒐りの際は「チョイ／＼寄つて下さい」とタツプリア世辭を撒く、君の應對は商人として堂に入つたものだ

牛豚 結城重五郎君

長岡市神田二之町
電話呼は二一九番

日本は何時までも肉食の國では無い、年々歳々肉食の人が増して来て半菜半肉の生活状態だ、人類生活の理想は或る程度まで脂肪分を攝つて相當のカロリーを保つにある、夫れ丈け近來肉食者が増加する譯だ、此の要求に依つて生れた牛肉屋の繁昌は又素破らしく客足が却々激しい、君の家では神田方面一帯を得意先きにして居るので猶更賣れ行きが好いこの評判である

大工さんが四五人來て普請して居るので鑿や鉋が態と散らけたやうに散らばつて居る鉋屑の中に置かれてある、君は夫れを氣にしながら「危いから氣を付けて」とか「汚いから何卒此方から」と歡待至れり盡せりだ、剩さへ外套まで脱がずに好いと兩手を差し伸ばし止め立てするやうな格恰する、幾ら寒いからとて外套を着た儘では失禮過ぎるので鉋を外して脱がんとすれば「着て居るさい／＼」と滿更に世辭でもかいらしく云ふ

佛の顔——眼も、鼻も、口も夫れを裹む大體の輪廓も斯う云ふ顔を稱すのかも知れまいと

思ふたほどだ、その人柄の好さうな顔付きの君が殺生の罪を犯して米鹽の資を求むると云ふのは矛盾を見出さずに居られぬ、けれども佛面鬼心、鬼面佛心だとすれば矛盾が引ッ繰り返つて君の牛肉屋は矛盾でも何でも無いと云ふ譯だ、京人形——此のやうな表しい顔の女は兎もすれば男を殺す大罪人だ、すると秤に掛けて君の罪が遙かに輕減する、去れど女は京人形のやうなものは幸福だ、男は夫れと同じく泣く子も黙る閻魔面より佛の顔が幸福だ、斯う云ふ腸を裁ち割れば要するに其處に美男美女より外にない、もう少し年が若ければ女房が眠れぬいだらうなと只だ顔一つから恁麼色々事を考へさせられた

君は此の人柄の好さうな顔に微笑を湛わ、今度電話は千九百十九番を呼び出して貰ふ事にしましたと云ふ、記者は階上を座敷にして牛鍋を出すやうにしたら相當に客があるでせう、今度電話の便利もあるのですから……と云ふて「實は元西洋料理を遣つた事がありますから夫れでも又遣つて見やか知らぬ考へぬ事もありますませんが却々甘く行きませんで……」と西洋料理の失敗談、成程々と聽かねばならぬ語彙が君の談の中に多くあつた

造花 鈴木豊次郎君

長岡市神田二之町
電話一九一四番

神田二之町の同店に立寄ると火鉢の前に坐つた君は到着した許りの繪葉書を眺めて居た、元來趣味の稀薄な記者も思はず手に取つて見る氣にあつたのはコロタイプ二色刷の「花咲爺」や浦島太郎の艶麗にして鮮美なるものであつた此の外夢二式を模倣した加藤まささを畫の第一輯「忍び泣き」や「虫啼かぬ夜」の繪

葉書に眼を奪れた、そして其の畫の新開拓、其の詩の情緒的ある事を讚嘆した
すると君は近來繪葉書趣味も向上して在來のものは振向かず新奇々と趁ふ傾向が熾烈とあつた、けれども際物は問題外で長岡座に上場された天野藤男氏作「都に懂がれて」や「國勢調査」の繪葉書は羽が生けて飛ぶやうに賣れる殊に國勢調査の方は第三回目の注作品が賣切れとありと電報で四回目の注文中ですと得意の鼻を高める、其の内に若い男の客が來て「國勢調査」の繪葉書のね生憎さんを喰ふ、君は一遅くも明日までは到着するでせうから其の時は宜しく……と客の氣を反らさぬ

尙ほ私は十九の歳まで金物屋に奉公して居たのですが其の年横濱に行き或る商船會社の出入中埠頭に着いた商船に用件が出来た爲め乗船すると船長室が三色ユミレで美しく裝飾されてあつた、夫れに身も心も奪はれて横濱の造花屋に三年年期を籠めたのですと極めて面白い職業變化的の動機を述べる、此處に開店の當初も丹念に製作したスミレで店頭を彩つた、通り蒐る多くの學生連は「ア、美しいかア」と嘆賞するが誰も買つて行く者があゝ、實に悲觀して居たが今日では嗜美に適合し一枝一蕾にも札ピラを惜まゝい、世の中は好くしたものだぞ呵々と打笑ふ

けれども未だ結婚の贈答に花環を用ひるまで程度が高くあらず目下の處ては不幸の際に限られて居る、君は自分の手に成つた花環、花盛桶、插籠、對籠、花瓶挿の寫眞ブックを出して見せる、恰も百花繚爛と咲き亂るる園に姿を現はしたやうな美感に打たれた、申遅れたが造花屋にゐる動機がスミレだから屋號も夫れに基因して居るのであるさうだ

電機 商會 金井晟吉君

長岡市表二之町
電話五五三番

南魚沼郡城内水力電氣會社の工事を請負ひ頃日落成式を舉行した表二ノ町金井電機商會主を訪ふと、机に對して事務を執つて居られた君は帳簿もペンも放擲して氣嫌好く應對された、暫くの間丸卓を中心に談笑して居ると奥から茶を淹れて來た婦人がある、君は「長岡商報の方です」と云つて記者の名刺を前に差出す、紹介された上で令聞である事を知つた

此の日は餘り濃い雲でもあゝが満天を蔽ふて居るので陽の光りが淡い、夫れ丈け屋内は薄暗いので陰氣である、君は椅子から起つて電燈のスエツチを捻るとバツト四邊が明るくある、流石御商買柄便利なものだと思つた、今まで陰氣であつた屋内の空氣は一掃されて莫迦に陽氣にあつた、同じい光力の電燈でも晝間の光りは違ふ、何となく鈍いやうな氣がするが夫れが卓上電話機、モーター等の商品を形容する事の出來あゝ色にして見せた、美しく……

尙ほ各方面の話に花が咲いて時の移るの知らぬ位であつた、大分御邪魔したからそろ／＼歸らうかと思つた矢先き、運悪く雨が降つて來た、君に取つては全く知らぬ記者であるが「洋傘をあげませう」と親切に言つて呉れる、此の好意には感謝せずには居られなかつた

折角の好意に甘んじて潔く拜借して歸らうかと思つたが段々小降りにあつたので其處に懸て霽れるであらうと云ふ、一縷の望を抱き棚にあつたスエツチや電燈を見乍ら猶ほブラ／＼して待つ、すると幸ひある哉稍や霽れた、此機に乗じて歸らうとすると君は「尙し途中で降らぬとも限らぬから……」と洋傘を頻りに勧める、そして態々辭す記者を丁寧につて呉れる、だから實に愉快であつた

玩具 若月久作君

長岡市本町二丁目
電話一〇八一番

「實は感冒に襲はれて此の通りなのです」と寐巻姿の無失禮を暗に詫びるのには先づ其の氣心が知られる、以前では風邪を恐れぬかつたが此の四五年間は流行風も油斷が出來なくあつた、迂濶りして居ると自分許りでなく妻子諸共冥途へ伴れて行く狂暴を威嚇に脅いた君の心境は面前にドス突き付けられた以上だと見は損徳あごは言つて居られぬから今日まで寐てをりましたとの事、無理もない

「今日漸く娑婆の風に當るやうな氣がします」とは言はれなかつたが然うした心持で帳簿の机に對坐して居る、夫れから變遷の極く激しいのは玩具でしやうの間ひに對し「眞個です」と眼を丸くする、そして茶請けに一出來事を提供した

最近某家のね坊ちゃんや下女に伴はれて來ていろ／＼玩具を撰擇した上アルコール燃くと汽水する聊筒を買つて行つた、子供ほど摸倣心に富んで居る者はないので消防夫の眞似

をして嬉々と戯むれて居たまでは好いが、或る時庭の片隅に木羽の小屋を建てそれに火を
放け焰々と燃え揚るのを待つて唧筒の放水に興味を感じて居た、水火相闘ぐジウー／＼の
音に駈付けた下女さんは吃驚仰天、早速主人に告げて唧筒の悪害ある事を認め取り上げ
た

教育玩具と銘打つた私の店で賣つた唧筒から斯くの大失態を演じたと聽いて實は其後眼
覺めが好くさい、實物教育の効果に次いで顯著あるのは玩具教育である、繪畫教育も相當
に有効だが夫れより一層だ、此の意味から子供の心理を解剖し感化の善惡に頭を痛まして
居る、兒童教育上斯くの如き人あるは慶す可きだ、辭さうと思ふと「未だ好いでせう」と
留めるので遂ひ永居した

長岡館主

小山榮次郎君

長岡市上中嶋
電話二七七番
九七九番

長岡市一流の料理屋として指を屈する長岡館だが感じと云
ふものは妙なものだ、長岡館と云へば旅舎を思はせる、「樓」は料
理屋を聯想すると共に「館」は旅舎を聯想するからだ、只だ一
字の違ひで料理屋と云ふ感じの映りが悪いのは愈奇々妙々だ、
夫れは扱て措き百人以上の大宴會引受け所長岡館の現主は君で
君の經營するやうにあつてから多少館運隆然との事、先づは芽出度い

緒顔巨軀の君は何時も帳場に坐つて筆を取つて居る、一見すると大變嚴めかしい處があ
るが出入りの或る老妓の「長岡館のねト、は氣の好い人だ」の曰くから透して見れば全く
顔に似せさい處があるやうに思はれる、此の前或る處で會つた時其の口吻から温厚の君子
と云ふ感じを得た、何んとなく寡言であつたが對手の話の終るまで神妙に聽いて居るのが
却つて多言の、全く然うですて、だから云々と喋々話の腰を折るより何の位好感を唆つた
か分らさい

店の者から、板番、女中さんに至るまで悪い評判は無いが其の内評判の好いのは女中さんだ、綺麗の美しいのも必須条件であければあらぬが夫れと共に氣轉の利くのも必須条件であければあらぬ、君の訓練宜しくあつて女中さんは氣轉が利くといふ評判、強將の下に弱卒を、悪い家庭に善き子あり、総て此の因果律に依つて居る者を見れば女中の好いのも君の好いのも同一だ

何時ぞや用件があつたので同館主を訪ふと生憎外出中との事、暫く待つて居る間、店の者が一直き歸りますでせうと浮腰を沈めるので小一時間邪魔して居だが遂々會ふ事が出来あかつた、記者は止むなく他に依つて目的を果したから其後行かぬで居るが今一度シンミリと會つて見たい氣持のする人だ

紙店米屋幸吉君

長岡市吳坂町
電話八〇四番

主人と云ふより長岡は「たト、」と云ふた方が早分りださうである、尙ほ若主人は「兄さん」と云つた方が早分りださうである、若主人の「兄さん」と云へば早分りの事は各地共通であらうが、従つて「兄さんは御在宅ですか」と行かれるが、一面識もない殊に初めての家へ「たト、は御在宅ですか」と云つて行くのは餘り親しみ深い氣がして舌が硬化する、其處へ行くまでは「たト、」と云ふ積りで居るが扱て行くと思慮具合で遂ひ「御主人」と云ふ、すると取次に出た小僧さんが「ハ、ハ、」と聞き直すので己む無く「たト、は……」と云ふと「ハア居られます」の案配、家の小僧さんも此の轍を踏んで親しみ深い氣がする言葉を放さしめた

「たト、」此の「ト」言を聴くと帳場に坐つて居た君は「ハイ私です、サア何卒此方へ……」と記者の顔に視線を注ぐ、丁度其の時大阪の紙問屋から地方販賣員が來て居たので先來の人に敬意を表し後方に居ると君は「前へ出ささい、火の無い處は淋しいです」と箱火鉢の

傍に坐蒲團を敷く、けれども記者は遠慮許りでなく一面には禮儀と云ふものが其處にあるから辞退して居ると態々奥から火鉢を取り寄せて前に押し出した、火鉢を見ると炭火が一つも無い、ア、煙草の灰落しにと氣を利かして呉れたのだかアと思つたら奥から小僧さんが火を持つて来た、煙草を喫ふ記者には灰落しに火のあい火鉢でも有難いと思つて居た處が又此の始末、有難さが二重にかつた

火の無い炬燵は殿中袴を穿いた時のやうに足が出ないが夫れと共に火の無い火鉢はお角力さんの着物を借れて纏とふた小男のやうに手が出ない、之れを察した君は「火の無い火鉢で……」と誠に濟まぬやうな表情、反つて記者が誠に濟まぬ位であつた

一刻も早く注文を取つて歸ううと思ふ大坂の紙問屋の地方販賣員は鳥渡膝頭を打つて、「ぢや斯うな願ひ致して置きませう」と折れて出たが商賣上手の君は見る處があつて却々「好う御座います」と云はぬ、いよゝゝ喰はれぬと見て取つた販賣員は「ソシナラ貴方に秘密帳に眼に掛けます、之れでドン／＼と賣つて来たのですから……」と照準を定めて射止めやうとするが矢でも鐵砲でも駄目の眼利きと遂々安く注文して仕舞つた

伊勢忠材料部主

今井種次郎君

長岡市本町一丁目
電話一〇三番

未來の市の工業界を双肩に荷つて立つ男、斯う云へば怎麼男で誰だらうと工業家は周圍を見廻すに相違ない、會社にも居なければ工場にも居ない、遠くて打揚げた煙火の如く音許りで姿が見えないのは無理もないのだ、角力取りてあくても五尺六七寸の男は幾らもある中に之れは亦漸く五尺三寸とかい矮軀だ夫れが而も本町一丁目の伊勢忠材料部を經營して居る今井君だとは又誰も思はぬであらう

日に焼けた色か夫れとも天稟の素質か知らぬが燻の掛つたやうな銅顔に金縁の眼鏡が似合ふ君は其の風毛に総てを現はして居る、外觀から内容を云々するのは得て間違ひ易いものだが蹴出しをダラリと下げて居る女のダラシの無い事と、耳朶の垢染みて居る男の不潔の事丈けは確實だ、此の意味から君の眼と鼻と口の三つから受くる感じは賢と敏と云つても憚りあるまい、迂濶に歩く大男の口から飛び込んで眼から抜け出る機敏さがある、去り

さて人を見縊るやうな不賢明さもない、換言すれば伶俐な男だ
店の椅子に凭れて静かに兩腕を組んだ時は業務に關する事を深く考へて居る、業務とは
言ふまでもなく工業の事だ、苦笑したり顰蹙したり或は獨り概嘆したり、時機が早いと考
へ直したりして居るのである

此の位の男であるから應接の態度は猶更巧い、別にチャホヤ言はあいで感じが好いのは
記者自らも解せあい心境に引摺り込んで仕舞つた、夫れが魅力だと思つた時チャームの偉
大なる事を知つた、聞く處に依れば君は商業學校を優等で卒業した秀才ださうだから必ず
や前途刮目して見る處があらう

銅店岩崎與三郎君

長岡市表一之町
電話九八一番

人が遊んで居るとか景氣不景氣の話から始め夫から自己を見付けて斯う云へ乍ら口を緘た
私は驛の移轉問題などは詳しく知りませんが兎に角市民として市永遠の幸福を齎らす處
に置きたいものです、其處に政黨派の關係を鳥渡も加味しあい、尤も嚴正公平ある之れ
を換言すれば市將來の幸福に立脚した移轉から何等の異存はあいが若し之れに背いた移轉
から結果は扱て措き不服です、斯う云ふ間にも僭越だとか、不遜だとかを何遍も繰り返す
のが耳に聒膩、商人だからとて市の事に就て云爲されぬ事はあいが身の程知らぬ事を言つ
たからとて口には手を當てあいが三猿の一を極め込む

「私は今月に入つて鳥渡も家に居ませんので……」と傍のト

ランクに眼を注ぐ、何方らでしたかと問はぬ前に見附、三條方面
から附近一帯を廻つて漸く昨日歸りましたと云ふ、商人は何處
までも商人らしく見附方面は今正月ですが依然景氣が立て直り
ませんで一帶に人氣が沈靜して居るとか、燕町の如きは殊に職

又話頭は逆轉して景氣に戻ると「恁麼事では何うもありませんから甘い儲け口を考へる積りです」と青菜に鹽の顔は見せぬ、君は此の道には天稟の才を有して居ると見わたる更に悲觀せず「其の内にも」と意氣込んで居る、此の意氣があればこそ君は不景氣から超然として居る事が出来るのだ、殊に廣き長岡市に銅板、眞鍮板を専門に取扱ふ店は君の處を措いて他に無いやうだから下越地方の顧客を一手に引き受けて居るらしい、夫れ丈け儲けも尠くかからうから泰平樂のものだ

君は記者が辭さんとするや「た饒舌りはしますが碌な事は言はれません……」と頭を掻く、尙ほ君は毒にも藥にもからん事を諄々しく云つて濟まぬと附け足したが記者に取つては有益なものであつた

無色の硝子が鼠色に裏まれた夕間暮れ、表戸に手を掛けて「ちや之れで失禮します」と云へば、店先まで態々見送りに出て「イヤ御構ひしませんで……御苦勞さんで御座いました」と夫れは、た客から又行つて遣らねばからぬ御丁寧さであつた

祝發刊

今井種次郎

株式現物
賣買業



商店

長岡市山田町
電話 四九三番

長岡市中島町

石油製造 松田富士松

電話 三〇九番

千手町三



洋服店 支店
伊勢支店
新潟支店
新長岡

デンワ二〇三三

長岡米穀株式取引所仲買

長岡市吳服町

米穀株式
定期現物

大橋新治郎商店

電話 四三九八三番

弊店は眞に御満足を願へる品物ばかりを買つて頂く主義です、
 どうか「買はかいでは悪からう」と言ふやうな御氣兼から充分御氣に入てゐかい品物を御買上く
 ださらい様に願います、長岡
 本二 山田屋和服店 電話二〇全番

旅館 白濱
 長岡市渡里町
 電話三三四七番

長岡市追廻し

素麴製造
 肥料販賣
 精米
 山口商店

□誠實を旨とし迅速に取扱申候□

長岡市柳原町

公債株式
 有價証券
 現物賣買
 利株式店

杉本佐兵衛
 電話略六〇一
 (ス)又(サ)

公債株式
現物問屋

長岡市千手横町



小黒爲策

電話(長岡)九三二、七二二三
電話(長岡)一〇二一、一〇二二
電話(長岡)一〇二二
電話略(〇コ)又ハ(才)

公債株式
現物賣買

須藤佐吉

長岡市關東町
電話七六九番

製粉製麵
雜穀肥料

谷六商店

長岡市吳服町
合資會社

電話(長岡)四四八番
電話(長岡)四四八番
電話略(夕二六)又ハ(夕)

諸機械製作

高橋家作

長岡市柿川本町(追廻)

長尾寫眞館は??

東坂之上です!!!

デンワは四百三十九番

石炭
コークス
酒類

長岡市本町四丁目

中島商店

電話六十三番

自轉車一修繕

ダブル商會

戸田慶入郎

長岡市銀行小路

日活直營長岡座

主任久保村稠君

長岡市渡里町
電話九七番

蓋を開ければ損し、開ければ損した長岡座は日活の直營と
かつたのは一昨年の九月であつたが夫れから昨年の八月の一箇
年も不成績、昨年の上半期も不成績、之れでは迎も十呂盤が採
れぬと云つて腰を折るやうな興業師は滅多にあるまいが折らぬ
興業師も左程數多くない

尤も一大株式會社ともある日活の事であるから平興業師と同一に談ずるのは無理かも知
れぬいが會社其物自體が單に長岡座の爲め全力を集中せざる事は勿論であるから平興業師
と見做す事が出来やう

其の平興業師と見做された損を男は日活本社から長岡座へ主任として派遣されて居る君
の事だ、君は斯う缺損續きでは他の直營常設館の手前肩身が狭くあるのでどうかして一つ
異常の好成绩を納めて見たいと考へ詰め思ひに思ひ悩んだ、處が一念巖をも通すと云
ふ、虎だと思つて一生懸命に放つた弓矢が巖を貫いたと同じく好成绩を納めたいと思つて

居た一念は貫徹した、そして下半年は漸く莫大の利益を見た

君は之れが俺の手腕であると思つた時は自負の鼻が天狗とあり、會心の情が顔に笑ひとあつて現はれた、處が茲に將に糠喜びとあらんとする大問題が起つた、之れから儲けて今迄の補填せをせやう、斯う胸算を立て居たのであるが生憎本月一杯で借館期限満了とあり市内の二三氏が借受けると強硬の態度を執り出した

大問題と云ふのは之れかど云ふ人もあらうが君に取つては小さくかい事だ、此の問題解決の裏面に飛躍し、表面には黒頭巾とあつて運動した君は「愈々手に入れました」と嬉しさう、着々と抱負が實現されて行くかと思ひば嬉しいのは無理もない、君は不斷斯う欣びの色を現はし開放的に話した

毛織 小林信次君

長岡市表一之町
電話五八二番

自家の商賣盛衰は主人の客扱ひの鄭重と粗暴なる事が分水嶺とあることは今更言ふまでもないが兎もすれば之れを忘却を未だ恕すべきであるが無視して厄介者が來たと云ふ表情で帳場格子の間から眼鏡越しで見詰めて居る主人がある自分が頭を下げずとも小僧が平伏するから澤山だと納り返つて白鼠、黒鼠が二進が三進と十呂盤珠を弾いて記けた帳尻に凝乎と瞳を据わて居る

恁麼主人に得て有り勝ちなのは常に圍碁に、將棋に、ブラ／＼瓢遊し、フト感付いたやうに帳尻を見る、見るのではなく疑はしいから眼光紙背に徹するほど凝視するのだ、其日々々を怠らず帳尻を見て居たら幾ら多くの取引又は賣買があつても左程眼に御苦勞掛けぬでも好いから、御客に接する餘裕も従つて其處に出る

此の點から觀れば表一之町の新古洋服毛織物商店の若主人小林信次君あごは常に用意が届いて居るから御客オイ夫れと應對して呉れる、如才かい小僧さんが愛嬌溢るゝ笑顔で勸

めて椅子に腰掛けて居ると信次君は電話室から出て懇懇たる初対面の挨拶をし面喰はせた。實は君が低頭して居る内に二度も頭を上げたのだから其商人らしい頭の低さは想像が出来るであらう。

君は先づ敷島を燻らし乍ら「丁度今朝歸りました」と口を切り現下の毛織物の大勢を徐々と述べた、此處で言はなければ分らぬのは二三日間鯨波の蒼海ホテルに避暑して居たのだ、温厚篤實の象徴とも見られる面長の相恰を崩して「総てが半額です」とカラ／＼笑ひ店の棚に山積された洋服セル地や羅紗を見廻した心持ち自暴氣味がいかいでもかいらしいが兎に角一反三十圓のセルが五割落ちの十五圓ともあつて居る今日平氣で避暑に出掛る杯は太腹だ尤も定立を三つ四つ越した若者であるらしいから今が活動期かも知れぬが其の意氣があればこそ發企人とあつて長岡毛織物商會を株式組織にて設立し隆盛を極めて居られるのだと思つて辭した、君は去るに臨み「今度千手の工場へ遊びに来て貰ひたい」と愛想を振撒き快感を抱かせた。

箆筒
建具商 本田キミ子

長岡市柳原町
電話四七五番

六十九銀行本町支店の横向ひに大きな屋根看板を上げた箆筒建具商がある、前を通ると、奥の方に數十人の職人が或は鉋を研ぎ或は竹釘を打ち或は打つた鉋前に磨きを掛け一生懸命に箆筒を拵つて居るのが見える、其處の主人が女である事は界限の人であらう通り一遍の者にはどうして分らう、誰もあの店構ひを見たらず男だと思つて居るに違ひあからう、否現に男だと思つて居たから面喰つた。

火鉢の前に慎ましく坐つたキミ子は眞岡の單衣に黒羅子の帯を堅く締め、油氣のいかい髪を飾りかく束ねて居るのだから風態は普通である、其上体軀は肥大し居ると言へば何となく見苦しく聞ゆるが身長が高いので不調和に陥らず、却つて美しく見える、尤も額には縮緬皺の小波をつくつて居る五十近いお母さんであるから容貌の月旦でもかいは優しい物言ひは女性の有する美が顔にまで現はれ之れで男を向ふに廻して居る女かと思はせた。之が主人だとは神からぬ身の知る由もかいは「好く入つじやいまして」と言つて勧められ

たれ茶をすゝり乍ら「随分待たせるかア」と奥を覗くと男主人らしい男は居ないのでア、主人だかアと感付いた譯、今まで女の云ふ事だからと馬鹿にして浮の空で聞いて居たのを遺憾に思つたが六喜十菊だ最う間に會はぬ、前半は拵措き後半の話を謹聴して居ると理論整然として徹底したものだ

膝の上に十呂盤を置いて桐材の相場も掛出す、数字の話は得て間違ひ易いものであるが更に言葉淀みなく説き立てる處は男の羨しい緻密を頭を有つて居る、萬事が此の頭だから應待も好く夫に死に別れても織手獨立で經營して來、這般の財界の颯風にも土臺のグラ付かぬのは何と言つても市内の男勝り第一人者だ

薪炭 山際津一君

長岡市表二之町

愈々需要期に入つた木炭が産地の倉庫も斯くやと思はせるほど何十俵と無く山積されてある店頭に一輛の自轉車が着いた乗つて來た仁は小出邊りの炭屋さんらしい、之れから客足の劇しい商賣は何んと言つても此處らに指を屈さねばならぬ、夫れ丈け忙がしいので暫く會つて辞退しやうと當初は考へて居たが

相手の君が潤ひのある話で牽制して居て離さぬ
殊に昨今は相場が不安定で商賣が仕難い時だ、此の動搖を前に控へて十呂盤と首ツ引きの生活、夫れを營む君は、怎麼馬鹿許り言つて居ます」と相格を崩して笑ふ、此の笑ふ事は何より藥だ、さうだらう醫者の色を變へ品を變へする氣休の藥より精神的の創痕を癒す、日常各所へ出沒し凡ゆる人と面接する記者は今日實に晴らし難い鬱憤を有つて居たが共に笑つて晴らす事が出來た、例令一時的にしろ胸奥に毒蛇の如く蟠つて自分と云ふ性體を苦こめた或る物が炸裂した煙花の如く消え失せた

君は尙ほ依然として壓迫から、拘束から、脱却し、解放された者の歡聲に等しい齒切れの好い聲で話す、而も名工の彫んだ惠比壽さんの様に絶えず笑顔を造り、君に對する記者まで苦樂を超越した世界の人とあつた氣がする、此の点から馬鹿口を叩いて子供の如く笑ふ事は非常に好いと肯定した

そして君も記者の意見と一致し、殊に煩瑣な生活を營で居る者には馬鹿口を利いて笑ふ餘裕がなければなりません。に對し「さうです」の肯定詞を呈した、商賣外の話は單に雑話であるが精神の慰藉に在る、然は謂ひ笑つて許り暮らされる世の中では無い、或る哲學者に云はすればヒステリー女の如く泣いたり笑つたり怒つたりする處が人生だ、人間味があるこの事だが笑つて暮らしたいのが本能だ、人の諫めにて晴らさあかつた鬱憤を君に依つて晴らしたのは神が導いたのかも知れない

分店主

紙店 田村寅吉君

長岡市觀光院町
電話九四番

若き詩人に見せれば垂涎たらしむる縮れ髪を如何にも美しく巻き上げて居る色の白い顔の所有者だから、商用の旅出に洋服でも纏ふたならば誰でも商人だぞと思つて見る人はあるまい

君は記者に向つて「どうも見た事があります」と云ふ、井中の蛙で故郷から手の届く長岡へも始めて足を踏み入れたのだが見た事があると云ふのは不思議だ、「場所は……」と聴くと柏崎であるこの事だ夫れでは不可思議に思ふ要あらんやだ、二十四星霜の春まで柏陽の山河と苦樂を俱にして來た記者だ、話は之れが冒頭とあり轉々と進行する

折角の好意を無視するのも失禮と心得、匙でレモンを掬ひ込み乍ら、中庭の盆栽を眺めつゝ上り框に腰掛けて居る事約一時間、記者の生れぬ過去の或る闇黒面の實際に就て語り記者の視聽を聳しめた

君は分店の主人とし商業界に活躍するより町の爲め多少奔走するのが刮目されて居るやうだ、夫れ丈け見聞は廣い、話の範圍は擴大だ、暇があるから一つ日の暮れるまで御邪魔して居たいやうだとさへ思つた位豊富か材料を有して居る。

尙ほ君の客に對する態度は心を動かす、時計を見るとモウ十二時も三十分過ぎだ、二時頃まで行かねばならぬ約束があるので崑山子と共に店を辭した、其時君は店先きまで態々送つて出た、恁麼事は何も取り立てゝ感を深うするに及ばぬのであるが此の送つて出る一事は容易であり乍ら却々容易でかいと見せ、別に五歩六歩運んだ處で腹の空く筈もかいが常人は怠り勝ちだ、送られた方でも別に損徳はかいが氣持の好いのは事實である。

青果 内山由藏君

長岡市表二之町
電話九一八番

一方は表町通りに面し、一方は上横町に面して居る曲り角に客足の繁き八百屋がある之れは元中島町に青果の卸賣専門として居た内山由藏君が人通りの劇しい好い位置ある事に着眼して一つ卸小賣を大々的に行つて見やうと移轉して開いた店だ、其處へ出てから未だ四年を閲した許りだが果して思ひ圖に當つて毎日朝から晩まで眼間苦しいほど來客があり一家總出でゝ大車輪、夫れでも手が廻らず待たねばならぬ事稍や暫し、甚だしい時は一時間も待つて居る客がある、之れ丈けでも如何に繁昌するか想像されるであらう。

奥の棚には罐詰類、次の棚には洋酒類、前の棚や臺には菓子、乾物類、麵類、見るから食欲を唆る甘さうか季節物の西瓜、眞瓜が山積されて居る、更に天井張りに吊られたコーヒ曹達、シトロン、サイダーの清涼飲料水が鈴生り、商品で店は一杯だ、其の中に帳場を設けて由藏君は筆を走らせて居た、名刺を出すに「丁度帳場の者が病氣ひ休んで……此の通り

です」と紺緋の筒袖着物に兵兒帯を締めて居る自身に眼を注いだ

暑いから茶代りにと侷める容器に堆い桃は、若い娘の頬紅と同じい色に熟し、お美味さうだ、客は陸續と来る、店は時を逐ふて忙しくあるので君は断えず御待たせしまして申譯がありません」を連發して恐縮せしめた、來客以外の電話の注文、書面の注文が殺到するので愈々繁忙と化し迎も此の分ではシンミリと話し合つて、見る事が出来まいと思つて失望した、其の失望は無駄である、間も無く薄氣味の悪い謙遜の辞を列ねてチャホヤ、商人の呼吸を獨占して居るやうな君の前途は向上發展、隆盛の曙光が輝いて居る、見た處は左程の男でもかささうだが本縣から囑託されて埼玉縣地方の産業を視察した人だから偉い處があるに相違ない

林益堂主

表具師 林貞次郎君

長岡市大工町

折々吹く秋風に開閉する入口に金文字で「林益堂」と書いた片觀音戸を押して這入ると茶の間の火鉢の向ふに君は座して居る、顔に溢るゝばかりの愛嬌を湛わし一見舊知の者に接する觀だ丁度先客が二人あつたので火鉢の前に座つた記者は周圍の軸物を見廻す、左手の方に掛けられてある麥風の「五月の鯉」や「清女」と題する純日本畫の表装したものが押し列べてあるので繪畫展覽會場へでも這入つたやうだ視線一轉すると未だ表装しきれぬ絹地の作が店頭の鴨居に二三枚鉸止めになされてある夫れが軟かく射す秋の陽に透けて殊に美麗だ

其内に一人の客は歸つた、君は「麥風さんは洋畫家の大野要三さんの號ですがどうです」と首を捻る、油繪具で刷く慣習が毛筆の尖きにも現はれて居るやうだが其處にその畫の生命が有るのかも知れぬと鑑識眼をもたぬ記者は黙つて眺めて居た、君は猶ほ店頭を指さして「あれが淺野赤城さんの悠久山を寫生したものです」と語を次ぐ

あれと云ふのは鴨居に止められた絹地の作だ、傍へ行つて親しく鑑賞しやうと思つたが時間があいで見合す、君は夫れから話頭を轉じて「和紙の高いのには仕事が生辛う御座います」斯う言つて冷めた茶を啜る

生糸の値の好い時は養蠶が盛んにあり従つて割徳の桑を培ふ爲め和紙の原料ある楮が減る、楮畑が皆を桑畑に變はると云ふ事を聴いて居た記者は尤もだと共鳴して辞す、噂に依れば君は随分好い腕を持つて居るさうだが鼻に掛けぬのは言葉の端末にも現はれて居た

本店主
寫眞 小林銀汀君

長岡市阪之上町
電話二四九番

遣つて來たのだ

入口に姿を現はすと黒朱子の作業服を着けた助手？が來客と應對中だ、話の模様から推察すると焼き直して貰ふのらしい、兎に角寫眞があつたら寄越して下さいと云ふ事で話も終りを告げた、記者は來客と應對中横槍を入れるのも無禮であると思つて傍で暫く待つて居たが見ず知らずの家へ飛び込んで「御免なさい」と一言云つた切り黙つて居るのも先方が何の爲に來たのかと思ふかと考へれば擦つたい

其處で助手の「寫眞があつたら寄越して下さい」と云ひ終らぬうちに主人に取次を求め

住めば都だと云ふが時には之れだから北國は熟々厭やにあらんと想ふ灰色の陰鬱な空模様が毎日續く初冬、斜めに降る風雨を冒して互尊文庫左隣りの前まで來た、そして門の標札を見ると「小林銀汀」としてある、更に屋上を見ると「小林寫眞館」の看板が上げられてある、實は一つは伺ひたい事があつて

る、名刺を持つて奥へ行き暫く経つと出て来たが「少し手の離されぬ仕事を遣つて居るので面會が出来ません」と悲報を齎らす、記者の頭には失望、絶望の文字が浮んだ、「イヤ然う急がぬのですから暫く待つて居りませう」と云ふと彼の助手は再び奥へ行つたが夫れ切り出て来ない、其代りに出て来たのが五十以上の御婦人である、其の婦人は「用件は何で御座いませう」と來意を確める

記者は「縣下婦人寫真展覽會に關する事で此處で一様面會すれば済む用です」と明らかに云ふと之亦奥へ行かうとしたが「夫れから何卒上り下さい」と傍の草履やスツバのある方へ眼を注ぐ、記者が火鉢の前へ坐ると間もなく色の淺黒い、眼の圓らかな身長の高い、感じの好い人が出て来た、餘り多く喋舌らぬかつたが其の言葉の上に愛嬌に富んだ性質が仄いて居た

ダブル商會主

戸田慶八郎君

長岡市銀行小路

別に用件もあかつたが通り蒐つたので銀行小路のダブル商會へ立寄ると當主戸田君は「イヤ先日は失禮」と云へ乍ら好く寄つて呉れたといふ表情を満顔に現はす、丁度獨りた客があつてその客の自轉車の修繕に忙がしい、巨大な故障は容易に發見されるが微細な故障は發見至難だ、夫れが機械に一番多く見る事で今日の修繕も只ケースがチンに觸れる所があると云ふ微々たる故障、何處に觸るのだらうと右から見たり左りから覗いたり、自轉車が顔であつたら穴があくだらうと云へ度い位

記者は假令用が無いと云へ乍ら一旦飛び込んだからには「御免」と出るほど狂氣染みたる事も出来ずマゴ／＼してゐると「まあお掛けおさい」と椅子を勧める、暫く経つと自轉車の修繕も済んだので先づ一服、長煙管で喫ひ付ける、降雪期は自轉車屋の霜枯れ時、本當から暇で暇で粉煙草も喫ひ盡すのだが今年には自轉車屋の當り年か未だ鏡を蹴る事が出来る

雪の降り方、夫れ丈け自轉車病院が流行る譯、去れど「逆さに振つても鼻血が出ない」と君はコボす、斯う云へく土藏が建つのだから堪らぬ

尙ほ君の一風變つてゐる處は十三の歳から四年間許り呉服屋にゐたが餘り頭をペコペコく下げなければならぬ商賣なので夫れが癢で此の自轉車屋に商賣替ひをした夫れだから對手も其の氣でゐられるので暇潰しに遊んで來る好い所だ、人の忙がしい處へ飛込んで遊んで來るは非常識極まる言葉だが之れは其の時の直感吐露だ、言葉に誤りがあつても感じに偽はりがあいかから誰にも憚らぬいと獨り力味返つても好い應對振りだ

若う一つ紹介して置きたいのは元鶴巻自轉車屋の看板を引き受け一昨昨年から獨立經營したのだ、其の後逐年隆盛に趨き若い君の幸多きを物語つて居る、仰々しい言へ方だかダブレ商會の看板は立體的で屋根を抽く事數尺、一寸看板としては異觀を呈してゐるので六九銀行の前だご云はぬでも分る

洋服 商 伊狩隆太郎君

長岡市千手町
電話一〇三三番

奥の方から出て來た君は外出先から戻つた許りだと思ひますが却向つて「早く和服を着て自分の身体にありたいと思ひますが却々……」と云ふ、随分多忙の身体を有つた君は何時も洋服で活動して居るらしい、否活動して居る

それから火鉢の前に座つた君は右のズボンの縫ひ目の綻びで居る處を鳥渡指で抑へながら「坐るので此の通りです」と和洋折衷の二重生活の破綻を暗示する、全く未だ洋服着用者を迎ふる設備が何處へ行つても出來て居ない、洋服を着て疊の上へ座るのは下駄穿き以上不調和であり不便である、矢張り椅子に腰掛ける寸法とあつて居るが洋服一點張りでも渡れぬ二重生活の現在には洋服黨自身が純日本式の家屋に住居し不便を忍んで居る有様だから家屋の改造は愚か二重生活打破は血を吐くほど叫んでも駄目だと云つた面持

記者が巻煙草を喫む付けんとする君は火鉢に手を翳し乍ら「人間ほど現金を者はあり

ません、今まで暑かつたので火に用がかい處から、何日も消いた儘です」と燐寸を持つて来る、そして自ら燐寸を磨り記者の煙草に火を點けて呉れた

だから誰にも媚る賣春婦の吸い付け煙草より遙かに甘く其の煙草が喫いた、人間の総ては感情である、甘いと言ふのは換言すれば只だ單に火を點けて呉れた丈けの事が非常に快感を唆つたのだ、應對の巧拙は斯く些々たる事が分水嶺とあつて居ることを知つた記者は好い教訓を得た

寫眞 長尾玉圃君

長岡市東坂之上町
電話四三九番

昨年祝融子に見舞はれた同氏の長尾館は東坂之上町の櫛比に鳥渡毛色を異にした洋風の建物を新築し舊臘二十五日より開業して居た爲め仕事が一時に殺倒し多忙で性があいと主人玉圃君は眼を廻して居る

君は元來奮闘家であつて朝は未明に起き、夜は早くも七時頃まで働いて居ると或る昵近者の話を聴き一寸訪問時間を電話で打合せて置いたので其の時間の内に行くこと「サア入らつじやい」と快活に迎へて一間に導く、君は「甚だ失禮します」と云つて洗滌つた寫眞にアイロンを掛けて居る、約五六枚あつたが之れは明日取りに来る寫眞であるさうか、記者は電力を應用するアイロンを始めて見たので「矢張り之れもアイロンと云へますか」と奇抜な質問を發すると君は敢て記者の狹見を蔑むやうな事もなく「ハアさうです」斯う云つて丁寧なアイロンに就て話す、此のアイロンは試みに使つて見て居るのださうだ

再びその寫眞を洗滌つて又アイロンを掛ける、其の間記者は仕事の妨げにゐるのを恐れ緘黙して傍の衝立の畫に眼を投げる、自得と云ふ人の描いた富士山である、此の人に達摩を描いて呉れと頼んだ處が「俺には達摩を描く人格はない」と拒絶したと云ふ君の言葉を耳にして自得と云ふ人は崇高な藝術觀を持つて居ると思つた

夫れから酒間小林喜助さんの祖父が來て居たので宗教の話が出た、宗教に對しては無智か記者ではあるが却々興味を以つて聽く事が出來た、統一した事は分らぬが、部分的に分るからであらうと自分は思つて居る、宗教家非宗教家として話題に上つた人は多くあるが其の内が一番感服したのは松田青針と云ふ僧侶である、君の話であるが一夕講話を求めると可く招聘狀を發した處が同僧侶は「招聘されるほどの者ではない」と云つて遂々來るかつか其の非凡に於てだ、人の偉いと云ふ者には俗人の解する事の出來ない或物があると思つて辭したのは十一時過ぎ、箒に手拭を被せるは長ッ尻退散の禁厭、此の禁厭して貰い度いほごた邪魔したのも君の身から出た錆だ

會社 須藤善一郎君

長岡市觀光院町
電話四〇七番

門口に來て見ると竹筒に挿された櫛の葉に悼みを覺ゆる忌中札が建てられてある、一面識のかい記者は祖父か祖母か夫れとも誰が亡くあつたのだらう等と思ひ乍ら「今日は……」と這入ると奥から誰だか出て來た、夫れは主人であつた、「御苦勞さんで御座いました」と慇懃に挨拶を濟ますと再び奥へ行つたが間もなく煙草盆を持つて出て來た、そして「此方へお出で下さい」と右側の垣根の押戸を開きもかて庭前へ出る

人も知る通り君は川上佐太郎氏の社長ある長岡染織株式會社の取締役で謹直の評判が高い、耳からず斯業の研究は當日怠らす随分通曉して居られるとの聲も弗々漏聞するので一つ胸奥を叩いて見やうと思ひ立ち中島町の絹物業小林久次郎氏宅の電話で面會時間を打合せて置いたのであるから先方も來意を理解されて居る、其處で豫じめ案内しやうと思つた亭に來たのだ、亭も四阿も同意味のものであるが只だ單に四柱の堀立作りでかい處から記

者は亭と呼ぶ

夫れは全く亭と云ふものであるか將又四阿と云ふものであるか表現するに適當の文字を見出されぬ構造のものである、之れは風流をそして茶氣ある君の好みの造りで庭前に位置せる上からは變態四阿と稱すが一番當を得たものであらう、竹と木で格子に組んだ椽から上ると壹疊敷の間だ、主客對坐すれば漸く火鉢と茶器の置場が餘る位のものであるが柱と云へ又壁と云へ俗眼を洗ふに充分なもの、此處で雪見の酒でも酌んだらちごと雪國者の根性を現はしつゝ庭園を見廻す

鼠色の雲濃き曇空、秋風蕭々將に雨至らんとする時庭木の梢から紅葉がハラ／＼と散る其中にも眼に着いたのは鶏の一群である、記者は養鶏事業の好い事を口にするに君は一鶏を飼つて置くに此處で糞をするので困ります」と亭の疊を指さす、鶏はそんな話には無關心で落葉を掻き／＼餌を養つて居る、冬近き晩秋の光景に眼をくれ乍ら辞したのは正午頃であつた

バナナ色附、果實、野菜
落花生、梨子、乾物、御菓子
洋酒 罐詰 問屋

内山由藏

味附落花生製造元
天下第一品 萬醬油特約販賣

長岡市表二之町
電話九一八番

和洋紙、文房具 紙製品卸
キリンビール 萬年筆卸
雜貨 印刷製本 商

長岡市觀光院町

田村分店

田村寅吉

電話九四番

長岡市觀光院町

株式會社

長岡自動車商會

電話 二五六二番

長岡市文治町

同文治車庫

電話 七七〇四九七五番

信越線長岡驛前

三山三合資會社

出張所

信越線
電話 二六八番
信越線
電話 九一〇番
信越線
電話 九一〇番
西長岡驛前

官製驅蟲用粉煙草新潟縣發賣元
北越蠶座紙製製造發賣元
日之出印紙袋製造發賣元
内 外 各 種 洋 紙
瀧の川卷紙製造發賣元
谷 長岡肥料製造發賣元
返 紙 封 筒 荷 札
中央生命保險中越代理店

新潟縣長岡市城内町一

瀧澤商店

電話 營業部 二二二番
保險部 三五四番
電信略號 (ヤマタ)

社 告

家庭用
ミシン
販 賣。教 授。

遠近ニ拘ラズ御希望ノ御方ニハ無料試用ト無料教授致シマス

米國シンガー裁縫機械會社

長岡市本町二 主任 南 與 吉

主任 矢野胃齋君

日活直營電氣館

長岡市間ノ道
電話四〇九番

此の間晝間行つたが事務員の出入口と見られる處は堅く戸で鎖されてヒツソリだ、折角來たのに會はずで歸るのも残念だから戸を開けて這入り「御免下さい」を連發したが人氣のかい奥は静寂の極致で山彦の鸚鵡返し、洞の入口で怒鳴つて居るやうな氣持にあつた、目貫の本町、表町を僅か距つた間ノ道通り

の晝は又淋しい、表の繪看板を見て居た四五人の童が静中の動であつた未練がましくも留守を承知で今一度「御免」を云ふたが返事がない、失意の歩を重く戸外に運ぶと其の童曰く「辯士が出た」記者も聊かテレざるを得あかつた、會つたのはその翌晩である、晝間は駄目だと此方で定めて、猪い話だが二重足は時間的不經濟だの徒勞だのと理窟を捏ね、寫眞を見序いでにイブロン姿の女給さんから刺を通じて貰つたのだから「忙がしくて會はれなければ宜しう御座います」と此方で遠慮處が世の中は面白いものだ間もなく女給さんが遣つて來て「事務所へ御出で下さい」の

快報、記者が姿を現はすと「イヤ何卒……」と右手で坐蒲團を押す、夫れから眞向上段に二用事は何で御座います」と出た、多忙の時を聊か割愛しての應對と看破した記者は秩序なく聽かうと思つた事をドシ／＼聞く、答ひも又早いので飽氣の無さ、之れではどうしても詰らぬ動作に安價を感激を覺て筆を運ぶより仕方がなくあつた

君の主任とあつて居る此の電氣館の日活直營とあつたのは丁度今より三年前の大正六年の七月で足掛け四年とあつたと聽く、長岡座も同社の直營とあつたので興業政策上同館は新派劇を上せたいのではあいかの疑問を氷解する鍵は君の手にあらうと思つて婉曲的に矢を向ける、すると同じ社の直營が二館對立して居る時は自然さうあると、興業政策の内幕に就て話すので成程と首肯いた、夫れから君は「何卒悠然寫眞を觀て行つて下さい」のた世辭を残して階下に姿を沒した

山田屋事
和服店
笠井幾太郎君

長岡市本町二丁目
電話一〇八五番

本町通りを往き來して居ると必ず眼に付くものが一つある夫れは金文字の「山田屋和服店」と云ふ弓矢を扱らつた看板だ其處の主人が君である

君は長岡市に於ては兎に角廣告意匠に取つて拔群の才を有して居る、さう云つちや臆見かも知れぬが廣告の意義を解して居る第一人者であらう、夫れ丈け俗臭を脱した看板を見る時流石君の仕事は違つたものだと思ふのが常だ尙ほ廣告意匠許りであく賣品の店頭配置などは殊に堂に入つたものである或る日立寄ると君は奥から出て來て商人特有の齒切れの良い聲で「入らじやい」と迎へる、此の瞬間の感じが客あれば買はずに出れぬものであつた、ソナラ買はずに出れぬ感動を與へる秘訣はドン麼ものだらうと思ふ商人もあらう、全く容易のものではない、記者が其の瞬間の感じを述べれば君の應對振りから——商ひ振りからと云つても好い——一藝術味を見出す事が出來たのである、敢て口に出さず、形に現はさず、其の時腹で人を

迎へるからだ、安價な世辭を振り撒いたり心にもかい歡待されると何となく反感を誘起する、故に此の裏から行く事が巧妙の策だ、要するに君は此の表裏を知つて居たからに過ぎない、「相場ですか」君は随分弱らせられたやうな表情して「モウ行き詰りでせう、中に上物即ち絹物は弗々撥ね返して居ますから」と一寸語尾に力を單める、夫れから間借り者の記者の眼に映つたのは座蒲團だ、品毎に値札が付いて居るので見るともかく見て居ると一枚壹圓卅錢、一圓五十錢、一圓八十錢段々を経て五圓五十錢位まである、五圓五十錢の座蒲團は餘り良過ぎて間借者に調和し合いが夫れが欲しかつたので「五圓も出せば此の座蒲團が買へるのですか」と云ふと「一杯飲んだ積りから廉いものです」と言葉を返す、全く品物ほど安いものはないが却々買はれぬものだ

恁麼事を思つて居ると君は「ヤア貴方ののには茶柱が立つた、縁起の好い事がありますよ」と頓狂聲を出すのでフト見ると成程縁起が好ささうだが「轉んだ方からアイスでも來やしまいか」と記者が云ふと君は「マサカ」と打消す邊り如才がはい

株式 反町 新作君

長岡市 吳服町
電話 長岡 五〇番
電話 長岡 八一番
電話 長岡 三三番

長岡株式界の大立物として知られて居る君の宅は外觀は左程でもないが内部は却々金の光りて眩しい、這入つて行く店員が「ハイ御在で御座いますすが何御用でせう」と問ふから「實は御會ひしたいのです」と云ふと「ハアさうですか、何卒此處方へ」と茶の間へ導く、爐火鉢の前に坐つて居る主人と云ふのは頭の薄く禿げた、近眼鏡を掛けた年の頃五十二三に見ゆる、未だ一ト働き出來さうな格恰である、初對面の挨拶を済ますと君は「實は昨日まで寢て居たのです、今日はヤット床から出て髪を剃るやら鬚を剃るやらしたのです、ソナナ有様ですから……」と自身の寢卷姿に眼を注ぐ、君は感冒の爲め久しく臥床して居たさうだ

「ハ、ハ」と三ツ返事して「寶田増資の事ですが、私等の眼から見ますと大日本合併であらうが増資であらうが之れが皆日寶合併の前提と見て居ますがア、井蛙の見ですが現在の状態では寶田の増資必要はないと思ひます、夫れども本社が東京に移轉して目石と對立するとか又は新坑開拓するから増資も急務でせうが何しろ不況に逢會し前年度と同様の出

油量を繼續して居れば好いと云ふ同社の消極方針ですから」と云ふ、記者は増資問題に就ての意見はあるが株屋さんの眼から見た實田増資!!!之れは誰も同じ事であらうと思つた折柄一人の表具屋さんが遣つて來た、君は「掛けて見て呉れ」と眼鏡を外して袖口で拭へ、再び眼鏡を掛けると「柳に驚だが雨の圖らしいあア、俺は何となく雨は嫌ひでの——」と未だ眺めて居る、記者も其の方に眼を注ぐと夫れは秀敏の書いたものであつた、其の外茶の間の隅に軸箱が五六本あつた、君はその軸箱を指し乍ら俺は飲み道樂があい代りに掛物道樂でしてあア、眼に一丁字かゝいが書位見る事が出来る」と自身?のあるらしい顔をする其の内に表具屋さんは歸つた、すると君は「錢は少し位高くとも好いが書を箴めて呉れるあアと何時も願つて居る、賈物を買ひ付けに來る者があるから予物騒を眼付をする、予子の爲めに美田を買はずだ、伴が今年商業學校を出るから慶應の商科へ入れて之れに學資の供給が終ればモウ金も要らぬから隠居して書でも眺めて居やう」と最後に附け加へる

(爐火鉢の中を見ると綺麗に敷かれた南部の山から出る小砂利に電燈の光りが照り映え一層美しく煌いて居た)

合資會社谷六商店主
谷 六右衛門

長岡市吳服町
電話一四二四八番
一四二四八番
一四二四八番

製粉、製麵、雜穀、肥料を營んで居る吳服町の同店に立寄ると顔の圓々と肥つた親戚の者だとか又は弟だとか云ふ人が店主の代理として應對された

「肥料は今が豫約購入の時機ですがどうです」と云ふと君は「お話をありません」と心細い聲を出す、愈々農村の經濟状態が疲弊して來たのかも知れぬと記者が云ふと君は「夫れ程でもないのでせうが兎に角米價から見ると多少財布が病んで居るでせう」との事、之れが實際であらう

君の處では肥料許りでなく營業品目が多くあるから肥料が不況だと見て取れば好況の方へ全力を注ぐ、不景氣の風は何處から何處へ吹いて行つたか位の調子で居るのは何より結構だ

其の内に何處やらから電話が掛つて來た、すると君は「チョイと失禮します」と机の方へ手を伸ばして受話機を取る、聞くともかく聞いて居ると運送屋あたりからの電話らしい

君は「船は藏王を下つたか、未だ下らん、さうか、ア、よし〜」と云つて切る、暫く経つてから思ひ付いたらしく店員に向つて「工場へ電話を掛けて呉れ」と急かせるやうな顔付、店員は帳面調べを止めて連接へ繼ぐ、店員は「今日の内に間に合はぬッ」と問ひ返す夫れを傍らに聽いて居た君は「どうしても間に合はぬのか」ソリヤ困つたかアと云ふ表情、その顔から眼を離さずに居ると今度は間に合はぬものは仕方がないさと云ふ斷念の表情に變つた

記者は今まで谷六商店に工場があると云ふ事は知らなかつたので「工場は何方らです」と問ふが君は店員と話し最中であつたので聽かぬかつたらしい
君は店員と話しが終ると「サア空茶ですが如何です」と急須を持つて居る、此處では茶攻めに遭つて歸つた

長岡製材所主
所長 高橋善吉君

長岡市草津町
電話五〇四番

同製材所は明治三十九年四月佐藤福松氏が卒先創立したもので随分古いものだ、當時は石油發動機を使用して居たが大正五年君の名義で買ひ取つてから電動機を使用するやうになり尙ほ逐次改造し今日では内外共に完備したものである

長生橋から上手の方百間許り距つた處に巨屋が横はつて居る之れが抑も大正七年改築した同工場である、同工場の入口に製材人夫が二三人材木を曳き込まうとして居る午後の二時頃だ

事務所を訪ふて総ての事務を委任されて居る内山平作さんが高橋さんの代理で應對され

た
木挽對材木屋の紛糾——未だ解決されぬらしいが夫れに就ても釣を下ろせば紛糾は紛糾だが水揚人夫の紛糾に話題を轉じて仕舞つた

君は「給仕は居あいか」と云へ乍ら奥へ行つて自ら十能を持つて来る、そして大火鉢に

炭をつぐ、夫れから間もなく工場の方から焚き起しを持つて来たのは給仕らしい、何時の間にも命じたのやら鳥渡も分らぬかつた、多分給仕が聲を耳に掠めて此の若い人が氣を利かしたのであらう

君は斯うして「何卒構はんで下さい」と云はせぬやうにさつさと火をカン／＼起す

そして此の大火鉢を中心にして共に腰卸した、君は腰を卸すと共に思ひ出したやうに「何しろ木挽さんも氣の毒は氣の毒だ、人足と同じ日當にあつたのだから……」と同情する、兎に角木挽と云へば多少ありとも年期を込めた一職人だ、夫れが人足と同じだと云ふのは鳥渡不服があるのは無理がないと記者も思つた

君は歸る時出口に居て「足もどが悪いから氣を付けて……」と注意して呉れた、平凡だが感じがいい

……

久保商店主

久保正司君

長岡市表四ノ町
電話五三七番

店頭に居た小僧さんに導かれて奥へ這入ると其處にはスト
ーブが据わ付けてある、その傍らに椅子が二脚對座されてある
事務室兼應接間と云ふ格だ

君は記者の顔を見ると心持ち顔に微笑を浮べ愛嬌好く迎へた
其の態度が會社員らしくもあり又商人らしくもあつた、要する

に純商人らしくかいと云ふに外あらぬ

君は今町の本宅を捨て、長岡に出て来たのは大なる目的を有して居たのだ、君を知つて居る者は等しく之れも知つて居るであらうが現位置に陣取つた當初は發明品販賣に従事してゐたのである、學校を卒へると飄然上京した、其の時發明品展覽會開催の折であつたので早速夫れを見に行き偉く發明心を喚起させられた、君は夫れからと云ふものは偉大ある發明をして見たいと考へ暇さへあれば瞑目沈思するやうにあつた、之れも君に先天的發明心があつたからだ

其の後二三の家庭用具を發明した、尙ほ自分の研究材料にせんと東京方面から發明品を取り寄せ傍ら發明獎勵の爲め之れを販賣する事にした、けれども今町の如き寒町に於ては駄目だ、勤くも長岡位の處であければ思はしくまいと茲に意を決し今日に至つたのであるが發明の上に發明が加はられるので發明品の壽命は極く短かつた、一年経てば若うより進歩したものが出来るので結局前の發明品は棚晒しとあるのであつた

君は發明には成功したが發明品販賣に失敗した、夫れが爲め今日では自轉車附屬品卸の傍ら小間物等を營んで居るのだ、けれども何日か大發明をしなければならぬと思ひ惱んで居る、不屈不撓、成功までの行路は坦々砥の如きものではまいと自覺して居る君の瞳は有望に輝いて居た

「さうですか大いに遣つて下さい」と聲援を與へ乍ら辞す記者の後姿ろを見送る處は事業の前の斯うした體驗が君にあるからだと思つた

合資會社西神田製材所

代表 星野右吉君

長岡市西神田一丁目
電話 七七三番

作業場の戸の隙間から濛々と煙が出るが事務所には誰も居ない、煙の出る處に人が居なければ一大事だと作業間の戸の隙間から奥を見ると其處には護摩木を組み立てたやうに木片を重ねて火を點じ炎々と燃は上る燄を圍繞し多くの人が手を翳して居る

「事務所の者ですか、私です」と云つて起ち上つたのは身丈の高い、スキー帽を冠つた、美しい八の字髯を蓄いた、眼の涼しい、而も上品な處は何うしても高等官吏と直感させる風采だ、タイプだ、君は先に立つて事務所へ入つた

「マアお掛け下さい」と椅子を勧める、オーバを脱がうとする「此處は外部も同様ですから着て居て下さい」と右手で止めて自分も椅子に腰掛けた、夫れから「星野と云ふのは私です」と懇懃に拶挨拶された、その時何んと又腰の低い人だと思はずに居られあかつた
今まで同製材所は君の個人經營であつたが今度合資會社にしたさうだ

此の製材所創立するに至つた動機は又君の君たる獨特のものだ、夫れは愛兒に及ぼす悪感化を憂ふたからだ

内面透察力の稀薄をそして無邪氣を坊ちやんが「お父ちやんは私に許り勉強して偉い者にあらなければならぬ」と云ふが「お父ちやんは朝から晩まで火鉢の傍で遊んで居て……」と云ふ

子供には肉體的の労働は働きと見わけても精神的の労働は働きと見わかい、成程さう云はれて見るとお父さんやお母さんは毎日遊んで居るやうだ、斯うして居ても眞剣に働いて居るのだと云ふ事が分らぬのが子供たる所以だ

君は子供の爲めに肉體を働かさぬのは好くないと考へ商業に志した、けれども商ひの素養は空つ切り無かつた其處で商ひの素養がなくとも出来るのは此の職業だと始めたのが製材所だ

材木は寸尺も誤魔化せぬ、公開的だから質の悪いのも隠されぬ、節のあるのは猶更だ、然らば口方便が要らぬ君は商ひに素養がなく又子供に及ぼす感化を思ひ此の製材所を起した、そして自ら作業服を着ける事もあると云ふ、之れて君の全般を察する事が出来る

素麵製造業 山口二五郎君

長岡市追廻し

追廻し町の橋の傍に素麵製造、肥料販賣、精米等を營んで居る店がある、其處の

主人が君である、外觀は斯くの如く營業科目のある店として眼に立たぬが眼に立たぬ丈け君の前途は遠遠であると云はねばならぬ、何日までも恁麼に屈服して居る者ではかい、聽て頭を擡げねばならぬ、夫れには多大の犠牲と努力を拂はねばならぬ、自

身の頭では斯う思つて居るので不惑を越えて尙ほ數年門松を潜つたらしいが未だ且つて老へた色を見せた事が無い、其の顔は恰も青春時代の希望と血氣とを物語つて居るやうだ、慇懃ある挨拶を交はしてから其の瞬間君の顔から稻妻の如く此の感想を得た、職人であり且つ商人である君の服装は夫れ相應な物であつて寧ろ邊幅を飾らぬと云つた方が君の心裡の正鵠得たる透察かも知れ無い、丁度先客が二人あつて話し込んで居たので記者は遠慮して前へ出ずに居ると君は「サア」と云つて座蒲團を火鉢の傍に敷き乍ら「寒いから此方から御出でなさい」と勸める、其の態度に誠意を認むる事が出来た記者は辭退するのは却つて

失禮に當ると考へ火鉢の傍に膝歩ると君は心持ち顔に微笑を漂白色々茶呑み話を始めた君は素麵製造の傍ら肥料販賣を始めた、偶々農村に用件があつて行く今で屈強な若者が二人も三人もして餅を搗くやうに豆粕を打ち砕いて居る、歸來匆匆君つぐと思ひらく之れは要するに輕便にして安價ある豆粕粉砕器があいからだ、第一器械を用へずに打ち砕いた豆粕は粗である、そして而も時間と勞力は莫大に徒費する、砕いた豆粕は粗である爲め稻田に施した結果は腐敗が遅く尙ほ其の上平均に行かぬ、其の損害は瑞穂の國には迎も眼を閉ふつて居る事が出事あい、其處で本業の素麵も大切だが先づ輕便にして且つ安價な豆粕粉砕器を製作して見ようと思ひ立つた、其の思ひを達して今回特許出願するに至つた君の特許出願中ある豆粕粉砕器は尙ほ改良の餘地があるかも知れまいが兎に角殆んど完全したものであるとの事だ道が君の顔には隠し切れぬ喜悅の色がマザ／＼と現はれて居た出口まで態々送つて出た君は「降つて困りますね」と云ふ、外面はそんな事には無關心に重い水雪がシト／＼と催して居た

大平鐵工所長

所長 大平八十吉君

自宅 長岡市坂下町
電話九〇番

工場 長岡市北中島
電話四九四番

信濃川から分水せる枝流、内川の土手を辿つて行く左側には多くの鐵工場が櫛比して居る、流石關東、關西の鐵工業と比肩するとまで世間から近來漸く認められて來た長岡の鐵工業丈けあつてモーターの唸り、齒車の軌り、ハンマーの音等で却々賑やかだ

其の中に大平鐵工場がある各地から注文を受けた製品は仕上げると大概工場から發送するやうであるが時には坂下町の自宅に運び込む事もある、鐵工品を扱ふ店は一々説明する迄もあいが多く土間だ、君の店先も御多聞に洩れず土間であつて其處には見本品の如く製品が陳列されてある、と云ふより山積されてある、その製品を見遣り乍ら這入つて行く君は爐火鉢の前に坐つて今來客の去つた跡方付けた、爐縁を拭いたり、茶器を仕舞つたりして居る、夫れを硝子越しから見て居た記者が「御免なはい」と云ふと誰か來たらしいと顔を上げる、その時記者がヒョットと顔を出すと力の無い聲ではあつたが「サアまあ上りあさい」

と泣くやうに云ふ、元氣のあいのは無理もない、後で聴く處に依れば君は耳を病つて永らく苦しんで居るのださうである

態々片付けた茶器を又出して茶を淹れる

そして長岡鐵工界の現況を語り乍ら何うかあらむものかあと深く考へ込む、其の何うかあらむものかあと云ふ事は斯うだ

漸く認められて來た長岡の鐵工界が多くは個人經營で大口注文に應ずる事が不可能だ、今の處は殆んど修繕工場位のもので製品注文は多く個々のものだ、齒車から齒車一萬個から二萬個の大口注文にあると逆もその期限に納入する事が出來ない、夫れと云ふのも要するに小工場許りだからだ、是非とも打つて一丸とあり纏つた注文に應じなければ長岡鐵工界は有名無實なものとなる

君は現状から合併否定して理想であると冒頭し乍ら前のやうな意味の事を盛んに説き立てたが其の時記者は聽て之れも實現しなければならぬものであると思つた

合資會社巴屋株式店

代表 小島忠一君

長岡市郵便局前
電話 四七九六番
五一五番

長岡郵便局の前に格子戸を立て廻した鳥渡大きい株屋がある、其處が巴屋だ、丁度今日は日曜の事でもあるから暇であらうと思つて寄ると意想外だ、店員の二人は机に向つて賣買があつたらしく帳面を記けて居る、フト上り框を見ると其處には眞新らしい足駄が四五足揃てあるので來客が知らぬと思つたが兎に角刺を通じて面會を乞ふと果して來客があつた、本意なく歸らんとすると顔色は淺黒いが並格の丈けの年配は三十前後と覺しき人が奥から出て來て「誠に恐れ入りますが午後二時頃御來訪願はれませんか、其の時は必ずお會ひするやうに都合して置きますから……」と丁寧云つて又元の奥へ去つた、其の應對と云へ、言語と云へ、一々筆で書き盡す事は出來ないが異彩を放つて居る

記者が再び訪ふたのは約束の二時頃であつた、すると又美しい髯を蓄いた來客があつたけれども君は「何卒御上り下さい、先程は済みませんでした」と店員を促し奥の間へ案内

させる、二タ抱ねもあるやうな大きな瀬戸物の火鉢を中心にして對坐した時如何にも記者の好感を唆つた、夫れは君の不自然あらざる微笑である、絶えず溢れるやうな愛嬌が眼元、口元に漂ふて居る夫れだ

君はシーガーに火を點すると「實は先き税務所の方から来られましたのです」斯う句切れよく云へ放つて尙ほ語を次がうとしたが記者は這入つて来るより金庫の扉の開け放しを疑問にして居たので「ハ、帳簿調べでしたかア」と解せた瞬間の妙な心理に駭られて口吟ぶと君は「然うです」と記者の顔を見詰める、君は最後に「蔭帳あんか拵つて置くものですか」と呵々笑て又新しいシーガーに火を點じた

一人のわ小僧さんが障子戸の切り貼りをして居る、其處に日曜の閑を見出した記者は随分長くた邪魔した

材木 布川卯吉君

長岡市西神田町
電話一〇八二番

功を見たのであらう

君は明治廿七年五月、僅か十三歳にて大工町材木商石塚榮次郎氏經營の村上支店勤務として五ヶ年間岩船郡方面の材木營業に従事して居た、明治三拾一年五月大工町同店へ歸り三十九年十二月末まで勤續して來たが同四十年佐渡郡へ滿一ヶ年間出張材木營業に従事して居た、同四十一年より上田町南清太郎材木店へ四十五年まで勤續して居たが茲に於て決然と志しを立て獨立開業したのである

君は此の經歷——即ち過立の足跡を顧みて此の間山小屋生治をした事などを想起された

君は大正元年現在の位置に開業したのである、其の間僅か一昔と経た許りだが商運益々隆盛に趨いて居るのは何と云つても結構の事である、夫れと云ふのも運は寢て待てでなく練つて待てといふ通り幾多の辛酸苦楚を嘗めて來たが艱難努力して來たか分らぬ、兎に角不撓不屈の精神を有して居たから今日成

都に住む人は山小屋生治に憧れて居るであらう、猿の啼く聲、狼の吼ふる聲、酒屋へ十里の山小屋に職業の爲め生治しおければあらぬと云ふのは其の辛さ言語外だと恐怖と不便を訴へる半面に又趣味津津々として尽きざる處も吹聴するやうな口吻だ、君は此の間茶を淹れる

夫れから床飾りの木株に就て説明する、その説明さるゝ木株といふのは誠に珍妙なものだ木肌の至る處珍が鼠茸のやうにあつて居る、君は「之れは杉の枝の股に生長した矢張り枝で病ひ」だと云ふ、寄生蟲の爲めですかと問へば「然うであく何かの爲めに壓迫されたまゝ伸長する事が出来ず要するに肉がはみ出したものだ」と職業柄却々詳しい、枝の股だと云ふ時態々その床飾りを取つて脇の下にかへ込み「斯うあつて居たのです」と分り易く手振り可笑して遣る處は誰か初對面の人だと思はれやう、全く初對面の人としては珍らしい應對振りだ

卍豊後屋事

商服 小林文平君

長岡市表四之町
電話 一一一 一 番

さいと云ふ

奥の方にはお息子さんと小僧さんが魚沼?の方面へ發送する反物の荷造りに忙かしい、小僧さんは其の聲を聴くと荷造りの手をやめて茶を持って来る、例の如くチョツと堰き込み句調で「まあ粗茶です」と茶托の縁をもつて記者の手に直接渡す、夫れから商人としては不調和な話題に花を咲かせる

市の時事問題—夫れは茲で一々云ふまでもなく誰も知つて居るが君の斯う時事問題に詳しい事は誰も知らぬであらう、記者は知らぬ一人であつた、唯だ意外と云ふ外にさいと

君は商事會社の取締役?か何かで同社の事務を取つて居るので滅多に自宅の方には居ない、偶々通り蒐ると店に居られたので立ち寄る

「入られじやい!!!」と斯う云へ乍ら反物の整理をして居た手を休めて迎ふ、君は夫れから奥の方を見遣り「オイ茶持て來お

思つて居る

斯う時事問題に詳しい事も成程と首肯されると云ふの外でもあいが店の方は息子さんが一切万端切り廻し君は殆んど隠居といふ形だから夫れ丈け物神兩的の餘裕があり、従つて種々の事を頭に納めて置く事が出来るのだ、二進三進が頭の中に充滿して居ては迎も斯う云ふ問題は市民として怠かにある、君も漸く息子さんの手が届いたから公人として活躍する事が出来る境遇にあつた

君は息子さんと對する委任權を尊重して「店の事は倅に聽かねばならぬ」と云ふ、息子さんは父たる君の前を憚り勝ちか言葉寡くあつたが商道に取つては君に劣らぬ手腕を有して居るらしい

昨年は申、今年は酉、何日まで迷信に囚はれて居る者があつて今年は婿取り、嫁入りが比較的多いとの事、嫁入衣裳が店一杯に飾られた君の店には繁昌の風が吹き初めて居た

公債
株式
現物
賣買



株式
店

徳
問
源
九
郎

長岡市東千手神谷醫院前
電話 六七三番
電話 (トク) 又 (ト)

紙商 田村 本店

長岡市神田一之町

電話四百二十番
電略(タムラ)

紙商 小出 本店
町治文市岡長
番九〇九番電

紙商 小出 本店
町之三田神岡長
番九六九番電

御料長
岡岡

市岡
電話
二九七
七九七

旅八
忠百

長岡市柳原町
電話二二三番

大黒屋事

青物商高橋 桑治君

長岡市柳原町
電話七八四番

各方面へ手廣く商ひをして居る君の店は元船江町にあつたのだが狭隘の爲め現在の處に移轉擴張したのだ、君は一見した處四十以上の年配に老けて居るが未だ春秋に富だ卅二歳の壯年だ、之れからが活躍期であるから漸く大あらんとする店だと見て差支へない

顔の老けて居るのは何と云つても辛酸苦楚を嘗めて來た事を物語るものだ、夫れ丈け世事にも通じて居れば分別も深い、偶には若いから血氣に疾つて冒險的事を大英斷に遣るが夫れが繪に書いた矢の如く何時も的に命中して居る位、初めは小賣り一方であつたが頓々拍子に大きくあつて今では卸賣りの方が多し

八百屋渡世、百目の玉葱、一ケの鐘詰、半斤の砂糖でも馬籠に入れて背負ひ「今日は毎度有難う」と御用先へ届ける小賣當時は君も自ら馬籠を背負つて歩いたらしいが今日では小僧さんの方に一切此の事は任じ君は卸の注文取りあごにて各地へ出張し滅多に宅に居

あい

此の日は丁度店に居て新聞に眼を通して居たので「御免！」と這入つて行くと「入らつしやい」と頭を擡げる、記者の顔を見ると頬笑み乍ら「サア一服如何です」と火鉢の縁を
手で撫でる、記者は遠魔會釋あく上つて其處に坐ると「疊の上は冷たう御座います」と座
蒲團を勧めた

折柄、來客があつた、君はれ小僧さんの名前を呼ぶ、奥から意勢のいな聲で返事し乍ら
「何御用ですか」と小僧さんが出て來た

君は火鉢の前に居乍ら「成可く勉強して遣りあさい」と小僧さんに云ふ、此處等が商人
としての身上、應對振りかごも堂に入つたものだ

東越運送株式会社

支配 江口恒太郎君

長岡市城内町一丁目
電話 五一九番

物憂ひ豆腐賣りの喇叭の音が淋しい秋の夕空に響く頃通り
蒐つた城内町の君を訪ふと奥さんが取次ぎに出られて「今丁度
風呂に入つて居る處ですから暫く御待ち下さい」と帳場の椅子
に案内された、奥さんが勝手の方へ姿を消すと唧筒の音がする、
君は未だ初風呂だから湯加減を試して居たらしい、店格子の間
からパノラマの如く變化する表通りを眺めて居ると随分面白い

驛員らしい男が洋服の下駄穿きで行く、小僧さんが自轉車で通る、四邊に藝妓屋がある
と見えて雛妓が手を翳しつつ踊りの稽古し乍ら來る、又見越しの松に黑板屏の圍はれ者も
ある町か無暗に異体の知れぬ白粉の女が往來する、其内に互尊文庫脇から意勢好く駈けて
來た人力車を避けそこあつて婆さんが車輪に觸れる、婆さんは後方から突き顛ばされたや
うな驚異の眼を恨めしさうにその車に注ぐ、もつと交通の頻繁を通りの「一時間の出來事」
を描寫しても下らぬ小説かごより興味があるかも知れまいと考へて居る

すると疎髯の濃い親しみ深い顔に微笑を湛ね、「御待たせしました」と手を揉み乍ら前の椅子に腰を卸す、お父さんと一緒に湯から上つた可愛いらしい坊ちやんが眞裸を記者に耻ぢるらしく襖の蔭に半身隠して「お父ちやん十呂盤借して……」と強請る、ふと見ると君は机の上にあつた十呂盤を弾くともかく珠を弄んで居たのだ

君は「おべべを着て御出で」と其の十呂盤を温かい愛の手を伸ばし坊ちやんに遣つた、坊ちやんは夫れを借れて満足したらしく奥へ行く、實は燃料や運送業に對する高見を承はり度いのですと記者が訪意を叙すと謙遜して「イヤー」と恐縮し乍ら種々有益な事を齎らした、そして通り蒐りの節は御立寄り下さいと世辞を云ふ、却々長けたものだ

神山商店主

神山敬太郎君

長岡市表二ノ町
電話 四三三番
九二〇番

豫ねて噂に聞いて居た通り全く君の應對振りは堂に入つたものである、記者は恐縮して了つた、砂糖、小麥粉、大豆粕を商ふ店としては縣下屈指の大商店、其處の主だと云ふ權大、豪慢は薬にしたくも無い、寧ろ一支店の主らしく頭も腰も低いのは君の性格の全般を察する事が出来る

君は元某實業學校に教鞭を執つて居た知人が大阪に行つて砂糖商に這入つた通知に接し昨年出版の折、一夕其人を訪ふて語つた處が「生徒に教授する商法は實際と大なる懸隔があるもので却々至難だ、迎も自分は遣れまいから好い口は無いか」と云つたので早速君は某會社の事務員に世話したと記者に話した

實は砂糖商に入つたとの知らせがあつた時は多分帳簿整理に雇はれたのであらうと思つて居たら大違ひ、自分が店務に掌はつて居たのだ、君は實業學校に在職した經驗があるので實踐躬行の積りであつたが實際の商法は然う單純な形式的なものであつた、其人も「十

一二歳の頃から商道に入つた人でも尙ほ此の商法の呼吸が呑み込めぬものを俺は無鐵砲であつた」と後悔した位だ

世間の者は商人等は右手で買つて左手で賣れば口錢が儲けらるゝと思つて居るが然う無難作では無い、其處には取引道徳もあり信用もある、故に泰西の賢哲フランクリンの「己の求めざる物は他人に施す可からず」を家憲として居る

信用を生む母體は正直である、此の間も刈羽郡小國の菓子商の某が砂糖を仕入れに來たが、其の時は未だ近く下落すると知つたから無理に當座用の砂糖を買はして歸り安くやつてから仕入れを導いたら涙を流して有難がつた、恁麼譯であるから相場動搖の今日餘り買ひ／＼と需要家に勧めぬとの事だ、之れだから今日の信用を得たのであらう

株式店主

野口昌作君

長岡市關東町
電話七九一番

話口を切ると云ふ事は對手の嗜好とか趣味を選擇してやらねば飛んだ失敗するものである、關東町の六九銀行支店の二三軒上手に株式現物賣買を營んで居る君は此の点に於ては餘程自覺して居たと見ゆ其の話口の切り出しは記者の腹中から飛び出したやうに興味を看破したものだ

一時疍馬の如く暴れ狂ふた株式界は去勢されたやうに沈靜したが又復八八艦隊編成の海軍案が議會を通過し夫れに使用する燃料問題から油株は擡頭稍や活氣を呈して來た、夫れに就て前途觀を拜聴しやうと思つて行つた目算が何うやら外れさうだ、何故あればと云ふに君は俳句の話に夢中だから……

此の話の出た動機は何だか分らぬ、記者が火鉢の前に坐すと「此の頃は頭に餘裕が無く中學時代は没頭した詩味俳味も全く去つて仕舞つた」と君の方かも口を切つたのだ、風流氣の無いものでも秋の自然の靈感に打たれると詩情が動くものだから或は其の底の君だ

と思つたら何卒圖らんやだ地方俳人と大分風交がある

刈羽郡椎谷の栗原ゆう／＼さんと盛んに文通した事やら同郡北條の桑田夕村さんやら未だ新潟の西村絶頂、頸城の垣上鶯池其他縣下知名の人の職業から地位、果ては句作の熟不熱佳不佳に就て話した、記者も満更嫌ひな話でないので意氣投合、相槌が打てた

尙ほ君は今では「鑑賞する餘裕位はありますが句作は出来ません、夫れより食ふ事が先決問題ですから……」斯う云つて左も愉快さうに大笑する、記者は團々たる仲秋の月下に雨の降る如く唧く蟲の音を聴き乍ら同じ趣味の友と一つ庭の上で枝豆を摘み／＼俳話に耽つたやうな氣持がした

古着 松谷清松君

長岡市本町一丁目角

本町通りから柳原町へ行く角に、印絆纏、セル羽織、節織の裕、兵兒帶等が枝垂れ柳の如く房々と下つて居る大きな古着商がある、其處の主人を訪ふと店頭の椅子に腰掛けて居た金縁眼鏡の男が「主人は手前で御座います」と言ひ乍ら店に上つた

九月といへば單衣と裕の更衣期であるから弗々古着を漁る人の姿を目撃する、農村の者と違つて町の者は白晝店頭に立ち裾を引つ張り乍ら襟から背筋、背筋から袖口、果ては表から裏まで微細に調べた上漸く値札を見る、斯うして一枚の着物を買ふにも一時間も費す事はあいが人眼を忍んで關所でも抜ける心持で行く、此處等は未だ上客でないが何うしても大ビラで店に付く上客は村に白挽き唄や藁打つ音が聴ゆる小春日和にあらねば出て来ない

搔き入れを前に控わて君は「未だ實際の處は新物より古着は割高なのです」と正直に腹

を裁ち割る、尤も高い物を抱き込んで居るのだから思ひ切つて値札替がされまい、けれ共然う許り云つてゐる事も出来まいから春先から今まで約三四回正札の書き換へをしたが底値を出さぬ、その底値を出せば客足がある事は火を見るより瞭の好季節、又一つ大廉賣を遣らうかと考へてゐるが周囲の同業者の手前があるので未だ實現されずに居るらしい可及的薄利で顧客の求めに應じて居るのであるが需要者の満足を買うやうには未だ行かぬ、君は「金融が斯う逼迫しければ安い品を仕入れて安く賣られるのですがあア」と嘆する、金に苦しむのは誰も變りがないが分けて商人は苦しうだ、其内にセル羽織が一枚賣れた

内科 小兒科

醫師 穴倉 鋼助 君

長岡市千手横町
電話 四八九番

久しい間、神谷病院の内科醫長を勤めて居た福岡大學出身の醫學士穴倉君は今では單獨で千手横町に開業し而も好評噴々だ、君の往診を好く途上で見る事があるが何日も餘りテバムくしく装ひをして居ないので質素の氣風が遺憾なく表に現はれて居る、邊幅を飾らぬと云つても夫れは醫者であるから紋付袴は着用し頭髮は綺麗に分けて置くから立派なものだ

さう云つては失禮であるが大學出の醫者は派手を金紗の襟飾を掛けた折襟の洋服で貴公子然と氣取つて居る人が多い中に稀に君の如き御仁があるから詰らぬ事だが印象を深める、實は君には或る處へ診察に来た時、烏渡會つて話を交はした許りだから夫れで君の全体を律する事は出来まいが僅か二タ言、三言とその態度で應對振りの巧妙を者取した斷らず笑顔を造つて、優しい聲で話す、大概の人から鼻髯の尖を捻り、話すのであるが君には夫れが無い、全く終始一貫氣障の態度が見られまいのは面と向つて話す者の好感

を唆る、之れは場當りの戯れ言であつたか知れぬが態々金子を出して買はねばならぬと見て取つた君は「含嗽剤などは鹽を入れて溶解した湯冷して澤山だ」と咽喉を病つて居る人に聽かせたのは職業柄感服仕つた

取れるものから地頭の胸倉でも取ると云ふ物質に傾いた今の醫者、その昔をたづぬれば醫は仁術ありも現在では藥の香の漂ふ蒲團を質に入れても診察料を拂はねば二度と來て呉れなくあつた、極端に憎まれ口を利けば取られる丈取らうと藥の色を變じ、品を變じて効かぬ藥を與へる、其中に「鹽水で澤山だ」といふ君は金儲けが下手だから患者の受けがよい

合資會社櫻井組

主任 櫻井金作君

出張所 坂ノ上校増築工場
電話 八九四番
出張所 高女校増築工場
電話 一四五番

草だが「電話に故障があるのではありませんか」と問ふと君は「私が掛けて見ませう」と言つてベルの把手を廻した、すると他愛なく交換姬が出た、記者は交換手に嫌はれたのだと云へば君は「ハ、ハ、ハ」と只だ笑ふ許り、然うで御座いますねと云ふのも變挺だし又何と云つて見やうがおいなので笑つて濁す、君も此處等は考へ深い

記者は電話の用事も済んだので失禮ををしやうと脱いだ外套に手を掛けると「まあ好いでしやう」と頻りに鐵瓶の湯の沸くのを焦慮しがつて居る、記者は「何れに邪魔に上りますから……」と外套を着掛ける、すると君は「折角に出でにやつたのですから少し位腰掛けて

坂之上小學校櫻井組建築事務所を訪ふと丁度君が居合せ

「サアまあお掛けあさい」と椅子と勧め、記者は一寸急用があるので電話拜借に寄つたのだから目的の電話を借れて掛けるが幾ら呼び出しても交換姬更に「モシ、何番を言はぬ、其處で劫腹にあつてベルを鳴らすが一向音沙汰あしだから失禮を言ひ

行つても好いでせう」斯う云つて湯が沸いたか沸かあいかと鐵瓶に當てゝ見て居た手で止め立てするやうな格恰する、記者は「有難う御座います、ソナナラ何れ」と失禮じやうとする、君は机の上の茶器に手を掛けて「今直ぐ淹れますのに……」と記者の顔に視線を注ぐ

君は夫れから發車間際に貨物を積み込む小荷物係りほど敏捷に茶の仕度をしたのは氣の毒でもあり其の厚意を無視した自分は自ら不届き者だと思つた、之れと云ふのも忙がしい君の邪魔にある事を慮つたからだ、用事があるから未だしもであるが別に之れぞと用事のある譯で夫れにも拘はらず長居して居るのは實に兩者の時間的不經濟であるから十分間下らぬ話をして居れば兩者の間に二十分生れる、夫れが眼に見えぬ金である、斯う考へて戶外へ出やうとすると君は「何の御愛想も有りませんで……」と附け足すので愈愈恐縮した

都屋事
京染田中正士君

長岡市表一之町

彷彿として居る

人間の冬枯れは不景氣の風が一足先きに持つて來た、斯うした自然觀から不景氣を根據として現在の染物状態に就き君は述べたので實に興味を以て聽く事が出來た、さう流行の變遷と言ひば云はれぬ事もあいが今回は財界の颯風が流行界を攪亂したので之れは特殊として見ねばならぬ、正直の事を云へは未だ一般に明るい黄系統の着物あり、絢爛眼も眩き長襦袢かり手に通して居たいのであるが不景氣の表徴は黒系統だと云ふので鼠とか紺黒の物を新調しければあちぬ、金が無い、と云つて新らしく買ふのは矛盾である、人間は

景氣の好い當時は極く華美なものゝ、華美なものゝ人心が趨く、丁度雪が消えて春の暖かい軟かな陽が輝く下に青葉若葉をつける草木のやうなものだが一旦不景氣の風が吹き初めると何となく自然の冬枯れが來たやうに今まで美しく彩つて居た諸葉が凋落し地味にある、人間の華美を好尚するのは自然の春に

斯うした矛盾に終始するものだと君は悟りを開いた顔

鼠や紺黒は比較的流行の變遷期間が長いと云ふので徳用に着る、經濟上から觀れば其處に確たる理論が生ずる、恁麼有様であるから此の頃は弗々ある染物も地味の物許り、從て金にあらぬと唧つ、全く店頭に乾されてある捺染でも抜染でも驚くほど淋しいものだ、色が暗いものにあるかと思ひば模様まで陰氣である、茲暫く地味か仕事をこなければあらぬと云ふ顔で正しく坐して膝に掌を置き力なく語つた

④ 株式
店主 小黒爲策君

長岡市千手横町
電話九三三、七三三
電話一〇一一、一〇四三

君は近來著しく男を賣り出した、之れと云ふのも義捐金、其他いろいろの募集、寄附には必ず應じて居たからだ、慈善は人間の美だ、光りだ、徒らに金を儲けて能事足れりとする人間には美もない、光りもない、陰徳あれば陽徳ありだ、君に此の志あるを快とする

君は刈羽郡北條村の出身で今日まで浮世の風波に揉まれて來た男、何日の頃かは知らぬが株式に手を染めた、處が買へば當る、賣れば當る、マルで繪に書いた的の矢だ

記者が訪ふた時は店火鉢の前に妻君と對坐して居た、妻君が取次ぎに出て夫れから君が奥へ導びく、すると電話が掛つて來た

君は「俺か、諾矣」と云つて立ち上り電話口へ出る、妻君が交替して今度茶給仕だ、「何だ、癪に障るあア」と君が電話口で云ふと妻君は「株屋は口が悪い」と白い顔を笑つて崩す、却々如才があくて愛嬌がある

店の方を見ると多くの店員が電話の應接に違がない、呼び鈴が絶えずヂリン／＼と鳴つて居る、株屋さんの電話は安いものだと思つた、夫れと同時に交換手さんも安いものだと思つた

聽て電話が終つた君は「ハツ／＼ハツ」と豪傑笑ひして妻君と交替する、笑ふ時金入齒がピカ／＼光る、君は「イヤ失禮と云へ乍ら火鉢の前へ坐つて夫れから話は用件に移り用件が済んでから文士劇の話に花が咲いた

午砲が其の時鳴つた、記者は話に興じて仕舞ひ意外に時間を潰した、君も迷惑であつたらうと思つて辞すと君は縁先まで送つて出て「何も御愛想がありませんで……」と云ふ、世辭に疎い記者はその返答に窮した

齒科醫師

入江 敏君

長岡市神田二之町

君は東京齒科醫學校出身である事は誰も知つて居るであらう、又石塚齒科醫院の養子であつた事も誰知らぬものはあるまい、同家の養子とあつたのはさう古い話でかく僅か五年前であるが故あつて離籍し又元の姓入江とあつたのは之亦最近である君は一見した處學者肌の人だ

現在の處に開業したのは昨年即ち大正九年十一月、籬落の菊花芬々と芳香を放つ吉日であつた、元竹山と云ふ齒科醫の跡が夫れだ、その竹山と云ふ人は不幸にして亡くあつたので君は早速其處へ眼を着けたのだ、前も齒科醫、後も齒科醫で患者が戸迷ひする事は絶対に無い、科違ひの患者が遣つて來た滑稽はありませんかと問ふて見やうと思つたが無いらしいから廢した位、齒科醫の暖簾を齒科醫が買ったのだから開業日淺くして入江醫院の名は汎く知れ亘つて仕舞つた

丁度訪ふた時は理髮屋へ行つて居られたとの事、母堂？が「一寸お待ち下さい」と呼びに

行く、記者は態々呼びに行くのからと云ふが其の人却々聴かぬ、遂々と呼びに行つて了つた
記者は階上の患者室に待つて居ると間もなく君は瀟洒洋服姿を其處へ現はした、そして
「イヤね待たせ仕舞した」と云つて奥へ導く、傍らを見ると鹿の角に尺八が掛つて居る、
その又傍らに本立があつて其處に村山龜齡さんの著した「山水日記」や「旅より」がある、
右視一轉して左視すれば横手の隅に書箱がある、其處には矢張り龜齡さんの著した「平家
史誌」とか云つた装幀の艶麗なものがある、記者は尺八から口を切る
すると君は「貴方、尺八を遣りですか」とシツペイ返し、無藝無能の記者も未だ尺八を
吹奏される男に見られる丈け力強いと自惚れる、君は「尺八は十年も遣つて居ます」と可
成り尺八は鼻の上に握つた手らしい
夫れから著書に話頭を轉すると「私は銀鈴社の會員ですから……」と云ふ、成程と合點が參
つた、患者室には一人の患者が待つて居る、記者はその患者にも君にも長居して申譯が無
いと思ひ乍ら辞す

白濱旅館

館主白濱喜八君

長岡市渡里町
電話四三四七番

形式に現はれた性格は有凡るものに見る事が出来る、君の
性格は白濱旅館の看板に現はれて居る、只だの木一夫れは山成
りにあつた而も立派な素地を見せたものであるが「白濱」の
金文字を認めてある處、如何にも俗臭を脱して居る、必ず茶氣
を帯びて居る人に相違ない、斯う思つて君に會つた故に何處ま
でも茶人に見えた

「今日は丁度忙がしいので誠に濟みませんが……」と愛嬌の好い顔に二つの笑靨を見せる、
記者は簡単に用件丈け云つて別れたから特に印象に残るものはあかつたが只だその中に元
氣の好い處は見遁す事が出来なかつた

快活な人——齒切れのいゝ言々句々から軍人肌の男を惚ばせた、君から女々しい處を見
る事も出来なければ優柔を見る事も出来ないうやうな感じがしなかつた、君は用件
を聴くと「何うぞ宜しく」と云つて奥へ行く、その動作に不快の念が起きないのは其の性

格理解に依るものだと記者は信じて居る

君は傍ら酒の販賣も營んで居る、大きな酒屋を凌駕せん勢ひだ、一舛でも二舛でも直ぐ配達する處に評判が好いが白濱は矢張り酒屋より旅館で知られて居る

白濱は、酒の販賣も營んで居る、大きな酒屋を凌駕せん勢ひだ、一舛でも二舛でも直ぐ配達する處に評判が好いが白濱は矢張り酒屋より旅館で知られて居る

⊕製材所
經營者 奥村修次君

長岡市草生津町
電話二八三番

同製材所は明治四十一年、中野、佐藤兩氏共同經營にかつたものである、その創立當初即ち木材組合名稱當時一監督として君は其處に勤務して居たが池中の蚊龍雲を得て今日自ら經營の任に當る事とあつた

君が右兩氏の手から引き受けたのは明治四十二年で夫れから木材組合は製材所と名義書き換へたのである、此の製材所は遊廓一等地の突き當りにある土手の雪道にハの字の靴跡を印してチラ／＼降る中を歩く自分の姿を客觀したらヒョ／＼と吹く寒風に熱して火の如く眞紅にあつた耳朶と双の頬を安オーバの襟立てで蔽ふて居た、恰も龜の子のやうに首を縮めて居るのが哀れにも見えた

向うから來た一人の櫛挽きに「其處です」と指で教へられて同製材所へ這入ると何の事だ材木許り、モシや家間違ひではあからうかと横手の家に問ふ可く行くと其處が君の住宅であつた、材木置場に飛び込んで人氣のあいのを怪しんだ愚問を自ら嘲けつて居ると奥か

ら肉附の好い、色白の女房さんらしい女が「ドナタで御座います」と出て来た、記者は「實は斯う云々の者です」と云ふと「暫くお待ち下さい」と一言残して再び奥へ行く、すると夫れと相前後して君は奥から出て来た

君は「さアまあ上りあさい」と軽く言ひ放つて火鉢の前に坐る、すると先の女が火を持つて来る、矢張り之れが君の奥さんであるらしい

記者は兩膝に手を置き乍ら畏こまつた格恰で問ふと君は「アノ問題ですか、同業者の中にはモウ妥協して居る人さへあるとか云へ傳へて居ますが何とか折合が着くでせう」と至極く圓滿に片付けて仕舞つたものだ

そして語は自分の事に一轉した、君は「私の工場では四十三年まで立鋸だけでした、が四十四年から立鋸も使用するやうになりました」と云ふ、立鋸と云へば長岡市では同工場が嚆矢であつたさうである

君は去る時に「何も構ひ致しませんで……」と云ふ、記者は其の時既に門外へ出て居た

角 彌 南 店

電話一五〇番

電話八八〇番

合 恩 田 商 店

國産梨果輸出問屋

萬果實卸
青乾土物

長岡市千手横町

電話三七八番
電略(ヲシタ)



長岡市外本大島

長岡鐵道株式會社

電話

本長岡	西長岡	越後關原	寺泊
社園	驛	驛	驛
五二五番	四一八番	九二二番	三三一番
四一八番	九二二番	三三一番	四一八番

長岡市表二之町角

電燈洋燈
硝子器具
醫療玻璃

卸商
大
大井硝子店

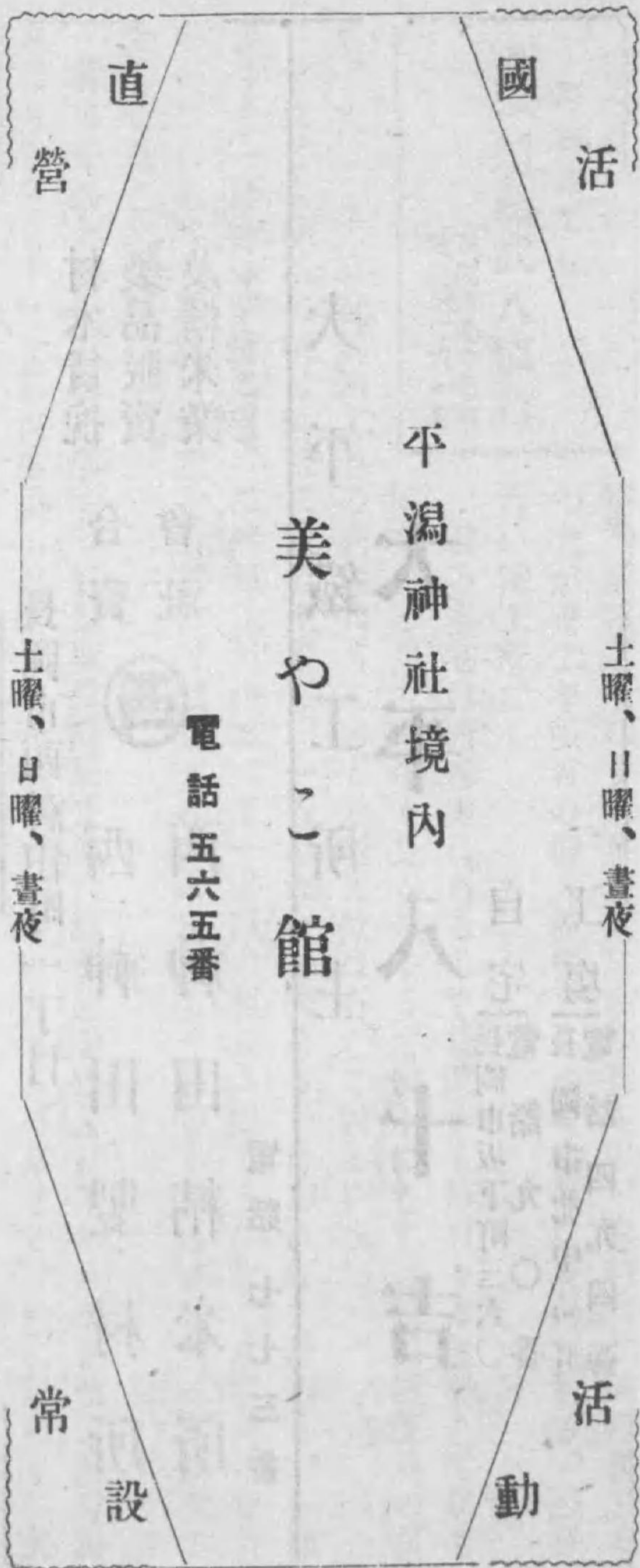
電話二五四番
振替五九七七番

長岡市文治町

御料理
生そば
うむどん
さ
か
い
亭

電話七八五番





長岡米穀株式取引所仲買人

米穀株式
現物賣買
林 小林治良商店

長岡市船江町

電話(國)三一九番

米穀部 關東町

電話(四)七七八番

材木賃挽
製品販賣
及精米業

合資
會社



西神田製材所
西神田精米所

長岡市西神田町一丁目

電話 七七三番

大平鐵工所主

大平八十吉

自宅 長岡市坂下町三六〇

工場 長岡市北中島町
電話 四九四番

須藤鐵工所
所長 須藤武八郎君

長岡市北中島町
電話 二六一番

同鐵工所は廿六年創立にあつたもの、當時は共同經營であつたが卅二年頃君の個人經營とあつて今日に及んで居る、随分古い鐵工所だ

君の本宅は西神田にあるので其處から毎日々々通勤して居る風尤もぞ見た處平々凡々のやうだが小にしては長岡鐵工界の覇者、大にしては世界鐵工界の覇者たらんとする理想位は有して居るやうだ

けれども順風に帆は世路に於て至難だ、一吉あれば一凶あり一喜あれば一悲ある、一難去つて一難來るが世の譬、俄然鐵工界押並べて一颱風の見舞ふ處とあつた、君は此の財界の一郭に起つた颱風に度膽を奪はれて仕舞ふほどの小人ぢやないが去りて君も人間ぢや少し吃驚したらしい

君は麥湯を注いで出し乍ら「好景氣當時引受けた注文品を仕上げてからモウ彼方此方四月にもあります」と烏渡も偽らぬ、此處等邊りが純なる人として話せる、故に記者も「夫

れぢや迎も遣り切れませぬね」と眞に同情しあければあらくあつた

其の折柄門口に二臺の腕車が横付けにされた、大野屋旅館の看板を着た車屋さんだから多分旅の得意先から来た人であらう、君は夫れを見ると直ぐ事務員に應接室へ案内させる來客と見て記者も長居は御無用を知り倉皇と辭した、軟かく吹く春淺き風に同工場の煙筒から昇る黒煙は龍の如く北へ〜と靡へて居た

大橋株式会社

店主 大橋新治郎君

長岡市吳服町
電話 三三三番
九八三番

「御免と」云つて這入ると誰やら鼻唄を唄ひ乍ら店先に配達された新聞を取りに来た者が「へい」と返事して其處の硝子戸を開け刺を出して主人に面會を求むると「私で御座います」と云ふ君は「サアマア此方へ」と茶の間に導く、鼻唄が出る位から今日は餘程好い事があつたに相違ないと思つて勧めらるゝまゝ座蒲團の上に坐ると然うでもあささうだ

何故おればと云ふに損しても得しても鼻唄位出る男だと看取されたからだ、君は「どうです此の頃忙いいでせう」と云へ乍ら茶を淹れる、飯炊きのお婆さんらしい女がチョイ〜と姿を現はす丈け、妻君らしい人が居あい、君は妻君を失つて獨身で居ると云ふ事は其後聞いた

一寸人好きのするやうな色白の顔に微笑を漂わ「一向駄目です」と頭を搔く、その裏面は記者の胸中にあり敢て語るを欲せぬが君の駄目は嘘である事は云ふまでもない、記者の

奇問に對する駄目は此の場合賢明ある人の取る所だ、矢張り立派な男だと思つた、顔や身体許りであくその心が……

消魂しい呼び鈴の音がしたかと思ふと店に居た店員が「兄さん」と呼ぶ、チヨツと時計を見て「市外か」と立つ、其の時一寸失禮しますと云ふ處まで儀禮に通じて居る、夫れから店員に向つて「東京だらう」と云ふ、店員は「さうです」とキツパリ云へ切る、時計を出して見た時君は顔を顰めた、夫れは彼の頃申込んで置いたのが今漸く通話されるのかと云ふ表情であつた事が讀めた、そして一通話の内に大分好い賣買が出来た、株屋といふ商買に憧憬の念が生じた、須らく筆硯を放擲して株屋さんにあるかゝると思つた

君は記者が思つた事を云ふと「株屋をどこにあるものぢやありません」と諫める、敢て懲れでも居ない様だが其内部に入れば苦しいかさういつて止めた、矢張り人の花は美しいの譬か、「イヤ失禮しました」と云へば「何も構ひしませんで、今度日曜邊りに遊びに来て下さい」とタツブリた世辭を撒く

北越水力電氣會社

常務 加瀬義雄君

長岡市小頭町
電話四六一番

北越水力電で會社で「加勢さんも随分色が黒い子」と云ふ下世話話を耳にした事があるが全く同社の加勢常務さんは顔色が黒い、眼は團栗で光つて居るから恰も生銅像のやうだ、或人は云ふて曰く生銅像とは無爲、無能の尊稱ありと加勢さんの生銅像は其の意味の舍むだものであく其の人格威嚴は西郷隆盛の銅像の如く備つて居ると云ふ事だ、形容が拙いから誤解を虞れる

取次の女給仕さんが先に立つて常務室へ案内された時の感じが下世話に依つて端なくも具體化されたので偶然の神秘をツク／＼思はせらる「ハ、ア貴方も柏崎ですか柏崎から随分新聞記者が出て居ります子」と口を切つて「江原さんといふ人も柏崎の者ですか」と結ぶ、記者は「左様です」と答ひると君は誰も彼も無暗に賞め立てる、如才のあの人だ、賞められて悪い氣のする者はない、此處等邊りの人情の機微を穿つて居る應對法に難があらう筈がない、記者たるもの聊か敬服せざるを得なくあつた、夫れより尙ほ茲に藉言せ

ねばからぬ事は北越水電に對する江原氏、江原氏に對する北越水電、第三者の記者も未だ忘れまい、言々肺腑を貫く筆陣を張つて水電に肉迫した事のある人、誰あらう江原氏だからだ、此の意味から君の頭に印象が深いのは無理もまい、必ず死ぬまで忘れられまいであらう

話頭は夫れから夫れへと轉じて賣名法に移つた、近頃平凡な事を遣つて居ては逆も駄目だから白を黒と云へ彼方だと云へば此方だと云ふ寸法、横車を通さねば人の耳目を惹く事が出来なくあつたのは世も澆季だと慨嘆さる、全くさうあつたのは認めると共に君の言葉に同感して辞す

長 盛 座

石田吉三郎君

長岡市文治町
電話區三六七番

眞に劇的情緒に浸る事の出るのは舊劇だ、其の名札の上げられた同座の仲茶屋入口に姿を現はすと、奥の方は成駒家附屬道具方や大工で開演準備に忙殺されて居る、座主の君は先來の客と仲茶屋で應對中だ、客と云ふのは柏日の浩郎さんから噂に聞かされて居た九州の人だといふ伊藤蒼龍さんだ、男の中の男だと云ふ意味があるのか否か知らぬが「九州男子」といふ固定名詞を想起する風流である、當の主人は「まア上りあさい」と框に腰掛けて居た記者に言葉をかける

そして先づ「前の者が石田さんは着物があいのかも知れぬ、何日も眞裸で居るから……」斯う言つて裸で客に接する無失禮の豫防線を引き大笑ひさせた、記者は三日間の榊割賣約の樓名、家號等を暗誦して之れが入不入に依り景氣不景氣の試金石とあるかごとく餘計な事を思つて居た

すると正木さんが油切つた顔を現はした、「石田さんはどうした」と問ふ、正木さんは「何

處も空き間がよい」と困つたやうな顔をする記者は成駒家一行の宿割に苦心して居るのだ
あアと直覺した、石田さんは夫れから暫く経つて「宿料位から嬾の腰巻を質に入れても拂
ふは……」と聊か憤慨氣味だ、其塵客を男がどうして一日何千圓の芝居が打てるものかと肩
を持たぬ譯に行かぬかつた

今春亡くかつた前の座主榎嘉治馬さんが「此の男から」と見込んだ眼識は確かかものだ
囁ぞ草葉の蔭で喜んで居るだらう、君は三條の人だと聴くが長岡の者は此の得難き興業師
に依つて春秋二季大芝居を觀せて貰はれるのだが感謝せねばあるまい、さうだ、嘉治馬
さんが冥途より「俺の顔を立てる努力は偉とする」と云ふ意味の感謝狀を發するのは遠く
あるまい

長岡市文治町
電話一〇四六番

千代本

佐藤平次郎君

長岡市文治町
電話一〇四六番

長岡病院の脇から一丁許り行つて左折すると末廣サイダー
製造工場がある、記者は其の場内を見せて頂く、案内者に導か
れて一番先きに這入つたのは二間四方もある調度室だ、ザラメ
を煮沸した甘汁の入れた甕が大きな水桶に浸されてある、
其の桶には一本のホースが通つて居る、斯くして断えず水を掛
け流しにしおければ冷却の度が保たぬのだと見れば大仰に言ひば水が瀧津瀬の如く溢れ落つ
る、夫れが床板の上に漏らぐので谿谷の巖に探勝の歩を運んだやうだ

清涼飲料劑とは云へ乍ら飲まぬ前から涼しい、一馬力のモーターで運轉して居る詰込み
機のある室に出ると若い女工さんが二三人頻りに壘の洗滌に餘念がない、孰れも水仕事と
て桐油紙の前掛けを締めて居る、年中無休で製造するのだと云ふが雪のチラ／＼降る冬は
冷たからうとフト同情心が湧く、之れではサイダーなどは餘り單純に造れるものだと思ふ
人もあらうが未だ未だ詳細に見ねばならぬ處が幾らもある、けれ共記者の目的は曾て聴け

て居た同場事務主任の佐藤さんに會ふにるので倉皇と辭した

そして其居宅を訪ふと苦も無く君と語る事が出来た、「彼のサイダーですか、今年は大打撃でした、製造する處を見ると宛然で水を販賣するやうですが却々原料は費つて居るので、處が一本貳錢、參錢と下落の商狀で、今季は少し頭を打たれました……」と話し乍ら茶を淹れる、奥の離れで横臥して居た藝妓らしい女が鳥渡此方を偷視する、暫く御邪魔して歸る時は屋上の「千代本」と云ふ角燈に灯の點く頃であつた

長岡分工場

専務 渡邊祐吉君

長岡市長町
電話四七番

工業の街、煤煙の巷、斯う思つたのは驛から吐き出されて長岡の西北の空を仰いだ時である、林立せる煙筒から昇る黒煙は魔の如く、入道の如く漂わ下界も爲めに暗い感がする

工業の街、煤煙の巷、此の工業の殷賑を測る尺度とある黒煙が天も煤けよと濛々昇る西北の空を仰ぎ乍ら、歩を西神田の鐵工所に運んだ、其處の専務取締役ある君に接見した時正直に胸を打開けた事に感動した、君は「今時景氣が好いさ」と云ふのは世間を銜ふものです「呵々大笑し乍ら給仕の持つて來た麥湯を勧められた

種々話の末、君は工場を案内した、機械の音、ハンマーの響、齒車の軋り、モーターの唸り、耳も聾さん許りであつた爲め折角詳細に説明された君の勞を水泡に歸したのは誠に濟まぬと空虚の頭を抱へ、紫煙の猛火を隈取る熔爐鑛を見つゝ幾つかの工場を通り抜け、鑄工場へと這入つた、今まで傍眼もせず一生懸命に働いて居た職工さんは孰れも丁寧な頭

を低げ敬意を表した

此の一事でも君の職工に對する日常が知られた、後で聽いたのであるが職工の誰彼かく愛兒の如く劬はるさうだ、君は人の頭に立つ天稟の素質がある事は態度の一端、言葉の一句にも現はれて居た

之れも後から聽いた事であるが運動界では寶田の大村さん、鐵工所の渡邊さんと斯う双壁に唱はられて居るさうだ大村さん、が長中の野球部に力を入れると、渡邊さんは工業學校の野球部に力を入れる、故に渡邊さんも大村さんと同じく長岡市に取つて野球界の恩人であるさうだ

織物商 佐野幸助君

長岡市柳原町
電話四七〇九番

も出かささい、君は夫れを知つて居た

中食を濟まして奥から出た君は「何うも御待たせしました」と慇懃に挨拶をする、夫れから端的に「御高見」をと切り出した記者に對し、「へ、御高見……」其那ものは一寸もありませんが吾々が常に考へて居る事から尠くは御座いますと先づ火鉢の縁に手を掛ける、そして隻言片句に至るまで責任づくめでは逆も開口する事は出来ません……と云つて責任無視する譯ぢやさいが言論は自由であるから然う口を緘して居る必要もあからうかと自分と思つて居るのですと君は話す前に斯う云つて綺麗に分けた髪を撫で付けた

沈黙が金か雄辯が銀か、地位に依つて責任ある人は吾々に

胸奥を叩かれる時此の事がフト頭に浮ぶと見ゆる、好く責任と云ふ箝口具を箝めて三猿の一を極め込む、其人の言譯が抑も雄辯は銀で沈黙は金だと云ふ、成程問題と時と場合に依つては、口は禍の門といふから閉ぢる必要もあらうが去りとて責任過重

帳場に坐つて居た番頭さんは小聲で小僧さんと呼ぶ、そして湯沸にた湯を催促する、其の内に二人の來客があつたので談は時々途切れた、話の模様から推察すると一人新潟の商人らしい、後の一人も市外の商人らしい、「久しく顔を見せませんでしたね」と奥さんが云ふと市外の商人らしいデツブリ肥れた愛嬌の好い男は「嬢が産に着いて……」とた目出度い返事町へ行くから序でにと頼まれたので斯う遣つて買つて來たのですと鍋蔓を振つて見せる
新潟の商人らしい男は番頭さんと結城縞の値段を十呂盤で示し合ひ出した、梟のやうに眼を丸くして「夫れで賣ると云へましたか、夫りや買へさい／＼」と頻りに勧める尙ほ口を尖らし乍ら「今夫れでは逆も私の店では賣られません」と附け加れた、其の内に二人の男は汽車に遅れると家内が心配するからとて袂を列ねて辞した、君は斯くの如く應對に忙がしく未だ談を仕盡さぬやうを面持であつた

洋物 雜貨 商清 水儀 八君

長岡市表二ノ町
電話一五七番

船來の香油や最新流行の粹を集めた種々の化粧品が飾り棚に一杯陳列されてあるので若い女の足を止めさうか一軒の店が表二之町に眼に着いた、時々前を通るので寄つて見ようか見まいかと思案して前を通り過ぎなければならぬ程此方へ來てから躊躇家とあつた

長岡市の商人は話せると思つて居たのが根本から誤つて居たからだ、東京の眞ん中に出してもさう耻かしくかい大きな店を構ひて居る其處の主人で啞がある、盲がある、夫れは斯業に對する産地の状態から相場の前途觀に就て皆目不通曉だから譬へた言葉で、實際其の本人の口は三寸の舌と相俟つて火も吐く、虹も吐く、切支丹パテンの術を會得して居るのかと思はせる、眼もさうだ、大阪商人と同じく底光りがして居る、關東、關西の大商人と商業舞臺で大芝居を打つ時見得を切る長岡商人の顔隈は紅で取らず血で間に合ふさうだ

其位の者であるから斯道の明暗は辨へて居る筈だが啞にあり、盲にあり白を切る、此の心理を解剖すれば面白いのであるが之れは扱て措き斯う記者を曲解誤解し煙たがる商人があるから飛んだ店へ飛び込むと飛んだ眼に遭ひ飛んだ不快を覚ゆる、此の意味から店を撰擇する、之れが抑も話せるか話せまいかと思案するやうにあり躊躇するやうにあつたのだ

話せると直覺した店は未だ曾て無かつたが君の店だけは奇体に話せると見て取つた、果して話せるのであつた、而も夫婦総出で種々の話を快く聴かせて呉れた、之れが皆材料に
かると思ひば感謝せず居られまい

丸サ事
株式 仲買 業 岸 祐 一 郎 君
長岡市 吳服町
電話 二八二番
二八二番
二八二番
二八二番
二八二番
二八二番

之れと明瞭に話さぬと「何卒御上り」と言葉を返して元の坐蒲團に腰を卸す

記者は初對面の禮習として先づ一葉の名刺を出し實は斯様云々と來意を述べた、すると君は傍に遊んで居た坊やに向ひ「二階へ行つてお父さんの眼鏡を持つてお出で」と段梯子を指さす、其の坊やは又善良でイヤとも言はずトーン／＼と足音を樂しむやうにして二階へ昇り眼鏡を持つて來て渡す、君は夫れを掛けて名刺を見詰める事約數分、老眼鏡掛けければ字面が鮮明しかい位だから無理も無い、少し消極的な人から若いものに店を委ねて自分では孫の對手になつて遊ぶ年齢、既に還暦祝も済んだらうと思ふと猶更老けて見る

吳服町の丸サ事岸祐一郎商店の門を潜つたのは去日の夕方
で勝手では夕食の仕度の忙がしい頃であつた、主人祐一郎さん
は「何御用で御座いますか」と奥から起つて來る、酒屋や醬油
屋の御用聽きとは少し違つて入口で事の濟むほど單純なもので
は無いから「少々御話がありまして上りました」と言つたきり

敢て氣の故許りであく全く老けて居る、けれども聽く處に依れば何月の事だか知らぬが取引高の一番多くあつた處は同店だと云ふ、其店主ある君が如何に力業ではあいな言ひ乍ら若い人を撞着たらしむる積極的を進取的を商ひの活動には老成氣分が爪の垢ほども加味されて居ない、そして禾穀を浸す洪水があらうが一會社の解散風が吹かうが終始一貫強氣であつたと云ふ

株式に對する一強者、必ずや齎らす處は驚異に價するであらうと思つて居るが今日は此の問題を提げて來たのではないから出直す事にした、夫れちや餘り融通の利かぬ男ぢやあいかと心の内で囁くから此の欄拜借、そして筆には現はさかいが應對振りの氣分の好かつた事を附加へて措く

辯護士 山田武雄君

長岡市坂之上町
電話 五四二番

丁度打悪しく訪問した時は主人不在であつたが「只今裁判所へ行かれましたから直き先生は御歸りにあります、何卒御上り下さい」と事務員に迎ひられて奥の間で待つ事約數分、其の内に隅の机に對して勉強中であつた女の書生？さんが多分待たして氣の毒だと思つたのであらう、お茶を淹れて出すと電話を掛けた、聽くともおしに聽くと「先生ですか、只今長岡商報の方が來られました」と一言云つた限りで受話機を掛ける

豫ねて名前は聽いて居たが未だ一面識もないので詰らぬ想像を描いて見た、夫れは「何麼人だらう」と云ふ題で小品文でも書くやうなものに過ぎなかつたのだ、其處に興味を以て一刻も早く面晤したい焦慮に驅られて正直に云へば幾度も座蒲團の上から腰を浮かしたもう歸られるか」と夫れは伸び入り入口の衝立から外面の方を見たのだ

聽てカラコロと表の方に下駄の音がした、浮かれ女の待人の來たやうを歡喜に胸が躍つ

た、だが然し鼠啼き丈けはしなかつた事を断つて置く、入口に姿を現はすと「サア此方へ……」と快活に云つて應接間へ導く、其處の椅子に腰掛けると君は記者の此地へ来た日を問ふ、斯う来た日を問はれる毎に一人々々多く顔が賣れて行くのだから嬉しい
「今日東京から歸つて夫れを知つた譯で實際留守中の出来事、僕も驚いたのだ」斯う冒頭して或る條件を附し記者の耳に或るものを齎らした……と云へば天下の大事でもあるらしく世間の人に思はれるが何に詰らぬ事さと白を切らう、白を切つても知る人で知るだから夫れよりだ、君に對して未だ言はなければならぬ事は風采の堂々、豪放磊落、元氣に満ちた自然の聲咳は想像通りで謂はば想像適中した之れだ

製綿 海津徳七君

長岡市千手横町

■ 嫺孝行が綿買ひにでも来たのかも知れぬと思つて横千手町の綿徳さんは小聲で「入らッじやい」と云ふ、記者の姿を顧みるとさう思ふのは無理もない、餘り上等の物では無いが紬の袷に高貴織の羽織を着流し而もセル袴を着用で何う安く踏むでも臨時手當を加へたら六七十圓以上の月収ある御役人風だからオット自惚が過ぎた羽織ゴロだから兎に角記偶者のある新家庭の主人と見られたのは事實だ
「ハアさうですか」と態度が多少變る、此の分では飯の種を得る事が出来まいと云ふ一片の杞憂に逢着した記者は何は兎もあれ猪勇的に突込んだ、人の職業の内幕まで聞く妙な奴もある者だと其の瞬間は胸に釘打たれると思ひがしてギョツとしたらしいがそんな表情は顔に現はさず、聊か微笑を湛は斯うで彼うだと淀みないがのでアベコベに此方の胸がギョツと無形の物體に衝かつたやうだ、決断に伴ふ成功の現實、夫れは之れも其一である

物は當つて碎けよの譬通り恁麼事を聴いても話しまい云ふまいと獨りで極め込む必要が
あいと考ひ直し夫れから夫れからと眞綿に首式を遣ると困つたらしい顔付きで濫々話す、
之れは當然の事だ、何々が話したと云つて無鐵砲な事を書く同職があるからだ、自分の事
は棚へ祭り込んで噫言云ふと力味返る者もあらうがさういふ無責任な、輕卒極まる人
が一人あると世間で全部夫れに律して了ふ、世間の狭見も餘りだが同職間にも此の点は自
重せねばならぬと思ひつゝ耳を澄して聴く、すると全く書いてはならぬ事が尠くあい、對
需要者でなく對同業者に面白くあいからだ、常識の篩にかけて公表する頭で居るが對手の
君は殊に心配さうだ

自分を信ずる事の出來ない者は人も信ずる事が出來ないものだ、君は初め信用し終りに
疑ぐつた、ア、悪い事を言つて了つたと不安の念に驅られて居る、初めから疑ぐる者は秘
密の扉を開放しあい、此の点に於ては君は自己も信じ人も信ずる事が出來る性質だ、終り
に疑ぐるのは言ひ過ぎた後の誰しもの弱点である

教^{ミシン}授 小島ミサ子

長岡市上横町

本町二丁目に本店のあるシンガーミシンの分店と云ふ構ひ
にあつて居る上横町のミシン裁縫教授のミサ子さんを訪ふ、奥
へ自ら案内されて「實は妾は幼い頃から針が好きで殊にミシン
は會心のものでした」と冒頭し夫れから殿町から現在の處へ開
店するまでの道程を述べた

夫れに依ると自分は齋藤女學館の裁縫教師を私淑し特に一年間補習科に居た、之れは勿
論ミシンを習ふ目的であつた、先天的に不器用な自分にどうして斯うまで自由自在の使用
が出來るかと思ふほど熟練して運針が巧く行く、其處に精勵と興味が湧き遂ひ東京に於て
開催された夏季ミシン講習を受ける事とあつた、各地から多くの御方が受けた、其内上京中
偶然にも心を打明けて語る親らしい友が出來た、其の御方はその後埼玉縣の粕壁町にミシ
ン裁縫教授所を開いた、自分にも遣つて見れと非常に勧めたので歸郷後早速兩親に相談し
た處「成功するものではないから廢せ」と宥められた、けれ共「妾に取ては友が成功して

居る實例もあり又それが刺戟ともあつたので承知がされかい「斯う言つて此の時勝氣を色を芙蓉の如き白い顔に現はす

優しい女の胸にも倒れて後ち休むの勇猛心があつたので開業を決心した、それは丁度昨年四月であつたので両親は「此の不景氣に向ひ酔興あア」と笑つて居たと云ひ乍ら茶を注ぐ、兎に角纖手好く獨立で今日の成功を見たのは偉とするに足ると思つた、未だ話は盡きあいが辭さねばあらの時が來たので辭す、店頭のみシン臺には細い糸から見ぬ夕暮れ頃まで熱心に練習してゐる婦人が三三人居た

東越運送株式會社

長岡市城内町一丁目
電話 五一九番

長岡市西神田町

土木請負
材木商



布川卯吉

電話一〇八二番

長岡市西神田町

長島鐵工所

電話三二七番

三島郡宮本村

土木請負業

合資會社

櫻井組

主任 櫻井金作

出張所 坂ノ上學校改築工場

電話八九四番

出張所 高等女學校增築工場

電話一四五番

米穀株式現物

長岡米穀株式取引所仲買人



反

町

新

作

長岡市吳服町

電話長一八番
長五〇番

純美術寫眞攝影
 ヲエリト寫眞攝影
 最新最良なる寫眞機新着
 修整專門寫眞技師招聘
 長岡東坂ノ上町二丁目
 互尊文庫隣
 寫眞館 小林本店
 電話二四九番
 館主 小林銀汀

誠

洋服毛織物 卸小賣商 小林商店

長岡市表一ノ町

電話略五八二番
(一三番)

實

利

薄

祝 發 刊

日 活 會 社

長岡座 電話九七話

電氣館 電話四〇九話

材木賃挽
製品販賣

長岡市草生津町

長岡製材所

電話五〇四番

オリエント號自轉車特約店

長岡市表四之町

自轉車及
附屬品卸小賣

久保商店

電話五三七番

長岡市吳服町

公債株式
現物問屋



商店

電話 八八八 一四〇
一四一 六八八

長岡市坂之上二丁目

高野齒科醫院

電話 八八四番

長岡物産陳列所

下田勇松君

長岡市坂之上二丁目
電話 八八五番

温厚篤實の君子が獨占して居るやうな赫顔肥大の型を備わ
てゐる上圓滿福徳の骨相を有してゐる君は貪乏神を偲はせる瘦
せぎすの相を有つた人の羨望の焦点とある事は請合ひだ、敢て
保証を付ける。

つても「ハア然うですか」と神妙に聞いて呉れるのは物足らぬほどで柔順でそしてする事
あす事賢女に見る如く淑やかだ、薄倅兒の悟りを開いた如く或は暴君の神の洗練を受けた
る如く総てが内に裏まれて居る、折角の獲物の前に鋭い瓜を出してゐる低腦の鷹が尙しあ
るとすれば瓜を秘めてゐる能のある鷹で外へ出さぬ處に生命が籠もつて居る、徒らに顰み
面する人、吐鳴る人より遙か恐ろしい人に相違ない、去りとして人の寢首を搔くやうな無謀
を云つたのでない事は斷つて置く。
自己を偽はるのではないが自然に對手が優ければ優しくある、對手が大きな聲を出せ

ば此方も夫れに應じて行くのは解す可からざる神秘だ、其の神秘に囚はれて君の柔順に同化されて了つた、細い聲で話す君に答ふる記者の聲も段々蚊の啼くやうに細くあつて行つた、此の点から暴は柔は柔を以て對するのは絶対であると感じた、君に取つては物産陳列所の品は所有物でないが自己の品物より以上に賣行きを氣遣つて居る、どうかして此の景氣を挽回されるものからして遣り度いと一刻も念頭に置く、片田屋さんの陳列を見詰め乍ら賣行不況を嘆ずる君の姿が今でも眼に泛んで居る

表町小學校長

星野 廣君

長岡市表町四
電話八九六番

ると斯うだ

昨年の秋季運動會は十月の十五日、矢張り悠久山公園の廣場で催した、當日は朝の間満天一片の雲翳を見る事も出来まい快晴ではあかつたが然う險惡の方では無い、喜び勇んで集つた千餘名の生徒を連れて會場の悠久山に着き豫ねて準備整ふた萬國旗の陽光形に張られてある下でプログラム通り運動會を開始した處が十時頃にあると俗に女心と云ふ秋の空俄かに魔の如き黒雲に蔽はれた

降らねば好いがと氣遣ひ乍ら校長さんは刻々の濃密に雲が層を爲す空を見詰めた、其の

職員室の左手の隅の黑板に「本日放課後運動會に就き會議を開く」と白墨で書いてあるのが眼に着いた、記者は會場に期日を聞くと校長さんは先づ「昨年の秋は申譯が無い事をした」と言ふ、何んの爲め申譯がないのか記者には皆目分らない、勿論此の運動會と關聯した事に相違あるまいと段々好く聽いて見

ら滾れる涙のやうに大粒の雨がポツン／＼と落ちた、雨宿りする軒もかい公園の廣場、附添いの父兄も生徒も周章狼狽して居る内に篠突く如き本降りとあり全身濡鼠とあつた

学校の地位と職責上校長さんは其時の光景を想起し「申譯があい」を連發したのだ、人力に依つて如何ともする能はざる不可抗の天候、朝の間は晴れて居たので運動會を決心したのが過ちであると自覺し父兄と生徒に對し陳謝するのは常人の出來ざる事だ、殊に應對の丁寧な事、記者が麥湯を注いだ湯呑を取らぬ内は御盆を捧げて居る一事でも他は推察される、其處が教育家の教育家たる所以だと言つて仕舞へば一も二もまいが名校長と稱さると人は何處か知ら違つて居る

驛に居れば驛長であるが家に歸れば主人である、其の風流から推察すれば爛々たる眼に嚴を含み、稍や圓い顔の輪廓に柔を表はし、部下を兩刀で統轄する機敏が窺ひ知られる、霜降りにあつた頭髮を見れば官海游泳術の一級証を若う夙に獲得して居る年輩であるが左程野心もまい面持に沈着の度が知られる人

長岡驛長

深澤勝太郎君

長岡市城内町二
電話二〇八番

だ

面會して見れば一層此の觀察を價值づける、顔の輪廓と眼を等分に視て居ると殴つた後で頭を撫でる宥め嫌すやうな表情の變化があつて失敬を謂ひだがフィルムを観て居るより面白い、斷らず鼻の頭に襞の細かい皺を寄せてニコ／＼して居るから感じが好い、尤も龜の甲よりも年の甲と云ふから無理もまいが來客があると、傍の給公にすぐ眼を注ぐ、夫れが「茶を淹れろ」と言ふ知らせだが尋常の人のやうに來客の分らぬ内にチャンと眼に物を言はせて仕舞ふ

萬事に抜かりの無いのは道が驛長の地位まで漕ぎ付けた人だと感服して居ると「マア粗茶だが一杯召上れ」と茶托の端を軽く持つて客の前へ差出す、此處までは通常の平凡だが茶で口も潤すと、年の若い人から花柳界、運動界総ての嗜好方面から話題を轉々と運んで行く、人見て法解く邊りは更に敬服した

尙ほ奥行きは浅いか深いか知る由もないが見聞の廣い事は驚く、米の事、糸の事、株の事、事の事から大事から小事まで通曉して立板に水を流すが如く滔々と辯じ立てる、餘り陳腐を比喩であるが深澤君には之れが一番適當をほご全く爽かき辯舌だ、冗談ぢやないが話好きの者から日の暮れるのも忘れて居るだらう、却々應對振りには巧妙なものだ

新道通りに店を開いて居る

丸 八 事

漬物 渡邊兼太郎君

長岡市東坂之上町二

「イヤ入らしやい」と迎ひる君の言葉には鬨氣満々と潜んで居る、張り切れるやうな豊満の肉體に無限の熱を保藏して、一朝事ある時は肌を脱ぐ、其時熱狂的に活動する身体だ、弱きを助け強きを挫く俠氣肌の男とも見られれば見られる身体だ、坂の上校の火事に類焼した君は間口の廣い十八尺の家を新築し、

新道通りに店を開いて居る

未だ市内には純粹の漬物屋さんには君一人ださうだ、八百屋營業の傍ら遣つた者もあるがどうも成功しない、寧ろ失敗者許りであると言き「俺が一つ成功して見やう」と店を開いた精神は偉とするに足ると思つた、君は取敢はず栗ボールを一つつまみかさいと勧め乍ら茶を淹れる、そして尙ほ談に餘念がない、その態度には不自然がないので氣に入つた、殊更らしく言葉を改めもしなければ、坐り直しもしないので此方も改まる必要がないので窮窟を感せず悠然談を聴く事が出来た、高田で北越紙の通信員をして居た齊藤君、田端

通りで漬物屋を遣つて居る、義弟の佐竹芳太郎君等が話題に上つた

最後に一番感心したのは子供に對して自由を尊重して居る事だ、尤とも客の前であるからどう斯う云ふのは失禮に當ると思つたのも一因であらうが五つ位にある男の子と、三位の女の子の兩人が菓子器のボールを鷲掴みにしやうが、佃煮を悪戯しやうが放任して置く事だ、干涉すれば干涉する程子供は泣く喚く、夫れが客に對して失禮であると心得て居る、干涉して泣き出せば客が宥めなければならぬから鳥渡迷惑する、茲等を考へて居る君も凡庸ではあゝい

長岡病院
主事 大森正雄君
長岡市坂之上町一
電話 一一九番

財團法人長岡病院の事務室でた邪魔して居ると必ず君が何に彼にと面倒を見て呉れる、此の日も負傷した一名の坑夫が搬び込まれた、記者は鶉の目鷹の目で社會の突發事件を見遁さぬやうに最善を盡して居るのだが何しろ單獨の外交自分で感付かかければ誰も聴かして呉れる者があゝいので無暗に重大事件を逃

長岡病院
主事 大森正雄君

長岡市坂之上町一
電話 一一九番

がす、今日は幸ひ見つけたから物にしやうと焦慮る

記者は「今の怪我人は何處の者です」と問ふと君は「聽いて來て上げませう」と外科室へ行く、間もなくノートに筆記して歸り記者に示す、それから「顔馴染の出來かい内は骨でしよう」と餘り素人らしくかい言葉を放つ、記者は「全くです」放げ出すやうに言つて「朝日」を喫ひ付けスパー、燻らす、君は一生懸命にペンを動かして居る、鳥渡覗いて見ると、院内の非常時に際する係りの配名下書だ、消火係り、非常持出係り、患者係りの字が列べてある、却々用意周到なものであると私かに思つて記者は「今度新ら

しく設けるのですか」と問ふと「イヤ誰かが書いた見た丈けでせう」と云ふ好い計畫であるから書いて見た丈けで葬るのは惜い氣がした

此の人の感心の事は記者が何時行つても「何うです面白い事はありませんか、變つた事はありますか」と云ふ、人の顔を黙つて見て行き過ぐる者は不快だが何か一言云はれると妙に胸が空く、まア如才のあい方かも知れぬが夫れより君の自ら聽いて來て知らせる行爲は心肝に銘じた、長岡病院で此主事を得たのは適所に適材を置たやうなものだ

長岡市表二ノ町
電話區二二九番

質屋玉垣清助君

長岡市表二ノ町
電話區二二九番

土藏が無ければ筋で許可しかい質屋營業の玉垣清助君は面倒臭いと云ふ譯でもあるまいが念入りにも起臥する處から勝手まですつかり土藏の中にあるやうだ、窓や戸前の目盛りでも怠らなければ祝融子に見舞はれても大充分を漆喰塗りの大土藏の中横町通りに面した入口から「與板屋」と染め抜いた紺暖簾を分けて這入り刺を通すると「手前が主です」と平身低頭、まさか上客と見過つた譯でもあるまいが莫迦丁寧に坐蒲團を勧めるやら、お茶を淹れるやらで申譯のあいやうを氣持がする

世辭に疎い記者も全腦全智を絞り「土藏住居は涼しう御座いますぬイ」と棹尾の警を發した、イヤ全く涼しいかつたからだから世辭ではあい感激の進りだ、そんな事はどうでも好い、先づ使命を果さねばならぬと思つて現況を聽くと、道が人の機密に干與する商買とて、却々實を明かさあい

茲に於てか智慧比べ、此方も隙かさず山を掛けるので遂々内幕の一部を明るみへ投り出した、虚榮の爲め質屋の門を潜る奥さん、株に失敗して来る會社員、藝者に頼まれて来る車夫、人通りの激しい銀座をパノラマで見ると、餘り書き立てると機密漏洩の罰があるから此處等で鳥渡失敬して置くが全く世間の懐を知つて居る者は質屋さんだ。君も餘り喋舌つてはあらぬ處が來ると茶を濁し話頭一轉する、今度は質屋の帳場格子から見たる世態の諸種相、之れに花を咲かせて大笑ひ、斯麼譯で有耶無耶に葬らうとした君の苦心は矢張り商買大事の爲めだと思ふと、同じ入れるから「與板屋」へ入れれば秘密が暴露しおいと金に困る人に提灯を持つ

長岡市千手横町

文治町から出て左折し山田町の雁木通りを歩いて行く。右手に一間許り奥へ引込んだ格子戸の入口がある、向うから來る稽古戻りらしい舞扇を持つた禿ツ子を邀して聽くと此處が「小松屋さんです」と象牙の如く白く透き徹つた指をさす、開けた突端、格子戸の鈴がガラン／＼と鳴る、此の時既に奥の方から

横町藝妓組合

組合 小林忠三郎君

長岡市千手横町
電話二〇九番

大きな束髪を結つた女が出た、そして訪意を聞くと「生憎主人は商業會議所の方で……」斯う鄭重に行先まで知らせて呉れた

スゴ六の賽の目ではおいが振出しが素的に好かつたものだから商業會議所へ行く。直ぐ會はれた、此處では肝甚の筆を染める餘裕がはいのは遺憾だ、と云ふのは君の話が莫迦に分つて居るからである、全く牛の爪より分つたものだ、夫れを紹介すれば斯うだ

女子と小人は養ひ難しと云ふ事があるが實際だ、殊に藝妓は猶更六ツ筒しい、其の六ツ筒しい者を統轄して行くには規則づくめで出来るものではない、夜遅く歸つて來ると何處

へ行つて遊んで居た、お客さんと居たのから何故線香をつけて貰はぬのだ、斯う根堀り葉堀りして攻め立てるやうな事をしたら藝妓は必ず面白く思はない、何處までも自由を束縛して行く事は要するに抱主の不利である、何故あればと云ふに藝妓は其間に於て地盤を拵ふ、地盤とはお客の事だ

オイ藝妓を呼ばう、ウンあの藝妓を招んだら好からう、其處だ、藝妓の夜遅く歸つたり遠出をしたりするのを放任黙視して置くとは知らず識らず抱主の懐が膨れるのは……とボンと胸に手を置く

横町藝妓は好い組合長をもつたものだと思つた、其の幸福を羨む藝妓があきにしも非ずだと思つた

一 辰 美
女將團 香 裙

長岡市文治町
呼出八〇一番

單に藝妓と云つても丸抱いや賣り分けでない、一辰美の家號で今度文治町に一户を構ひ自前で商賣を始めた裙だ、抱は妓から言はすれば女將さんの格式、誰が何と云つても一辰美の主人には相違ない

今日は開業披露でもする積りか朱塗りの膳腕が奥の方に積み重ねてあるのを見乍勸められた座蒲團を敷きもせず傍らに小ジンマリと坐つた者を發見した、夫れが記者である、其時何故座蒲團を敷かれなかつた自問自答に苦しんだ、斯う底の知れぬ洞の如に遠慮の深くあつたつも要するに異性に對する感情の支配だと一方で解釋すれば一方では夫れが禮儀だと説く、何だか彼んだか譯が分らない

噂に聽けば公家藝妓と唄はれた裙だとの事、榮枯盛衰は世の例ひの確証が眼前にある疑ぐるのではあいが眞個に公家の血筋を受けたものとするれば嫌な男の機嫌氣を掠取つて浮いた／＼の裏面は撥持つ織手に村時雨の如く涙が降りかゝつたであらう、紅い袖は臉を拭ふ

御料理
千代本

長岡市文治町

デシワ 一〇四六

櫻組製造櫻印革ヘルト
三河セメント一手販賣

長岡市城内町一丁目

土江秀次郎

電話四五四番

設新部負受工塗

●日本セメント株代會社式理店

◎工業用諸油類 藥 長岡市坂之上二丁目

◎漆及漆工材料 佐藤文吉商店

◎ペンキ及塗工材料 舖

電話 四一五三番
振替東京一〇七九三

●東京海上火災保險會社長岡代理店(兼營)

縣下取引界の

經濟實業之北越 每月發行

雜誌 機關雜誌!!

大阪屋事
書籍店 星 秀助君

長岡市本町一丁目
電話八五七番

報告する傳令士のやうな堅苦しさがあつて何となく妙を感じを抱かせる
夫れ丈け味も酸ッ氣もない無味乾燥、刺身の後に乾物を喰ふやうな氣持がするが餘り沈
香も焚かず屁も放らずと云ふ人間でもないらしい、尤も夫れが職業であるから驚くまでも
ないが出版界の状態から財界不況の今日の賣行き状況まで一度も頭を捻らず談ずる處、經
濟界の影響した處などは専門家らしい秩序が立つて居る

寧ろ記者を煙に捲いた方が得策だと考へたのでないかと思ひば思はれぬ個所もないほど
初めは沈黙を守つて居たが後から論じたのはどうしても解けない謎だが斯うあると又

○御料理

○艶姿本

○文治町

謎を解いて見たくある其處には必ず善悪は扱て措き手段がなければならぬ應對だから……
誰しも人情には變りがない好んで自分の店の寂れた事を廣告するまでもないので可及的に隠蔽しやうとしたのだ、さうした態度が歴然と看取されたが更に我身にあつて見ると無理からの事で矢張り「此の頃は不景氣で店が寂れた」とも云へぬ、我身をつねつて人の痛さを知つた記者は商法上から之れを見れば一つの商略、道徳上から見れば虚偽だと思ふと其の態度の不純に憎悪を覺けたが商略だと考へれば何ともあかつた、

長岡市船江町
電話 三一九番
九一九番

株屋さんの生命も信用である、信用があかつたら目星しい客が着かぬ、君の店は信用確實だ、それ故目星しい客許りだ、ナニどうせ裸一貫の身体だ、負けたら姿を糶悔するか泣きさへすれば事が済むと云ふ無資産の一攫千金を夢見た者があつて、負けたとて姿も晦ませねば又泣かれもしない歴々とした資産階級の客が多いから店は絶對安泰だ、砂上樓客の憂ひがない、

株式 小林治良君

長岡市船江町
電話 三一九番
九一九番

君は尙ほ片腕と頼む人間を見出した、夫れは女婿の歸一さんである、姉の婿に俺の名を耻かじめぬ人間が欲しいと日夜夫れ許り思ひ籠めて居たお蔭があつて株券師として先見の明ある新進氣鋭の歸一さんを得た、夫れからと云ふものは自分は會社の監査役然として樂隠居だ、店は歸一さんが處理して居る、その帳尻を見て暮らす君の身の上が幸福で老齡者の羨望の的だ、
女婿歸一さんは北千手に別家して其處から毎日々々通勤して居る、朝は早く、夜は遅く

實にその忠勤は一龜鑑だ、記者が丁度訪ふた時は歸一さんが帳場の机に片臂突いて居た、現主治良さんは火鉢の前で先客と應對中だ、先づ慰懃ある挨拶を交はして其處に坐ると歸一さんは膝を組み直して心持ち好く迎へる、記者は用件を述べて居ると奥から店の者が茶を持つて来る、間もなく用件も済むだ、來客の踵は絶えぬ、忙がしい中に長くた邪魔するものも失禮であると思つて立ち歸らうとしたが文士劇の話やら花見の話が出て烏渡腰を浮かせる事が至難だ、歸一さんは「土手廻りも未だ早い」と遊び場所に困つたらしい事を云ふ、成程櫻が咲く、霞が曳く、此の春の晴れた日曜日に足を運ぶ場所があい、氣の利いた公園が一つあいの淋しいと思つた、イヤ實に淋しい

歸らんとすれば歸一さんは「何卒宜敷しく……」と立ち上り椽先まで送つて出る、言葉や筆で言へ盡せぬが應對振りあどは立派なものだ

青果 恩田長七君
問屋

長岡市千手横町
電話三七八番

素破らしい繁昌、忙がしくあくてどうしやう

「御免下さい」と奥へ這入つて行くと帳場には君が手紙を認めて居る、色の淺黒い、眼許の涼しさうな人だ、その涼しい眼許に愛嬌を漂わ乍ら「入らッじやい」と先づ筆を放擲して迎ふ

夫れから之れまで會つた人と異色の感を與へた事は記者の祿でもあい名刺を戴いたことだ、敢て見習ふた譯でもあいが記者も君の名刺を戴く、之れが禮儀だ

店の右手には北海道から來たといふ馬齡薯の俵がウンと積まれて居る、青菜もある、梨

もある、鑑詰もある、何處の八百屋にも敗けぬ品澤山だ、記者は之れを人間が皆食ふのだと思つた、時空恐しくあつた、殊に馬齡薯の俵を見た時馬も笑はれぬと思つた、でも十人や二十人で食ふのではないからと思つて居るが、君は現在長岡青物果實問屋の組合長として活躍して居る、店は今こそ自分の名義にあつて居るが開業當時は義理ある兄さんの名義にあつて居たものだ、君は立派な人間であると思つた事は義理ある兄の手前、公々然と名義を出すのが憚り度いと何處までも遠慮して居る、義理の兄さんと云ふのは敢て失脚した譯では無いが只だ事情があつて大杉！樓へ復歸したまでだ、けれども開店の功勞は甚大なるものであるから自分獨り今日その功勞を獨占するといふのは忍びぬ事だといふに過ぎない、實に美しい人間らしい心ではあひか、君が經營するやうにあつてから商運隆盛に趨いて居る事は暗黙の裡に讀めたが君は更に商運の隆盛を口にしない、此處らが取柄だと思つて取つて辭す、

或る夕方同館の事務所を訪ふと國活本社から突然派遣され

國活直營美やこ館
主任 岡本徳太郎君

長岡市平潟神社境内
電話 五六五番

突然派遣されたといふのは活通あらざることも承知であらうが梅原主任が病氣で亡くあつたので其の後任としてだ、君は懇懇ある挨拶を交はすと、サア此方へお出で下さい、何遍となく反覆する、此方とは君の前であつて又火鉢の前だ、夫れから君は未だ來た許りで土地不案内の爲め困て居るらしいと云ふ事を言々句々から想像する事が出來た、觀客の趣味程度即ち之れが君には新來の爲め遺憾乍ら分らぬ、觀客がドンナ寫眞を好むか？君の頭には此のエンタロゲイションマークがあるのみだ、新派から十年一日の如く子役を配した涙ッぽい通俗的ものか、それとも藝術的のものか、舊派か

らドロン／＼のケレンものか、それとも勇肌の俠客ものか之れが全部見當が着くと同時に君は観客の氣に向く優秀寫眞をヨリ一層吟味して提供しやうと焦慮して居る

何、營利の問題だから當然の仕事だと云ふ者もあらうが夫れは間違つた考へだ、之れは少くも観客に忠實ある所以だ

雪の長岡にも春が來た、櫻の花の背景に霞の幕を曳いた自然の舞臺が展開する、その舞臺で眞に活躍して見やうと遙々東の國から來た君の前途が長岡キチマ界の刮目點だ、同業者は勿論観客まで……

辭さんとすれば君は「何しろ未だ來た許りで西も東も分りませんからドーゾ宜しく……」と寸分の缺點もかい應對振りだ

北越商會
運動具商 小林喜助君

長岡市表五ノ町
電話一〇三番

暫く待つて居ると外の方から主人だと云はれる男が這入つて來た、身長の高い、色の淺黒い、薄い鼻鬚を蓄いた年頃三十四五歳にもあらうかと思はれる人だ、記者は稍や暫らく飾り棚の運動器具に眼を放げて居た、捕手の用ひる胸當と脛當を見て居ると左手に楯を持つたスバルタの闘士の颯爽たる英姿を連想した、此の瞬間自から双腕に渾身の力が罩もつた、剛健を思想が泉の如く湧いたのだ

文弱に流れた現代の青年、其の一人である記者は運動具賣る店頭へ來て運動の體育上缺く可からざる事を新らしく感じた、人間は環境に支配されて居る者の確證、夫れは記者許りではあく君の商人らしくかい風采も然うだ、幾ら商人でも呉服屋をどとは異ひ角帯に前掛姿は此の店に調和をかい、矢張り君の如き棒縞の單衣に兵兒帶姿が似合ふ、寧ろ洋服姿が店と調和するかもこれかい、夫れにしては帳場の改造が急務だ等と走馬燈の如く思ひの糸は頭から手繰られる、物思はせる店だと入口に突立つて居ると「サア入らつしやい」

斯う云ふ聲と座蒲團を据ゐる音がした

其時は記者の眼が運動器具から君の方へと轉廻した、満顔に愛嬌を湛へ乍ら運動の話を始めた。前の帳場に居た店員が思ひ付いたやうに立ち上り奥へ「ツカ／＼」と行く、砂糖を入れた甘い麥湯を連んで来た、枯渴した咽喉を潤して又話す

猶ほ前の帳場に居た店員が相槌を打つ、運動家には熱狂家が多い事は如何なる關係か知らぬが事實だ、その店員は遂々辛抱し切れず膝乗り出して「實は私の店でも野球俱樂部があるのです此の間の大會にもマーチャン俱樂部及び神宮俱樂部を屠つた鐵工所俱樂部に勝ちたるも優勝戦の権利を放棄した様を次第です」と氣焔やら悲嘆やらだ、之れが應對の終始である

シンガミシン

販賣部 南 與 吉君

長岡市本町二丁目

縫物は時代の推移上手工が器械裁縫に侵されつゝある事は云ふまでもない、夫れ丈け愈々ミシンの世とあつた

本町二丁目の同店に立ち寄ると若い婦人が主人に取り次ぐ、アイロンを掛けた火鉢を中心にして對坐した時記者は君の想像外に壯年なのは先づ一驚を喫した、尠くとも四十以上の人であらうと思つて居たのに何ぞ圖らん、漸く三十にも手が届いたか届かぬ今が奮闘盛り、殊に瀟洒な洋服姿が似合ふといふよりその服装は常時の活動を物語つて居る

君は又奇抜な處がある、曰く「南は實際の自分と懸隔のある事を話すといふから餘り話すことは憚ります」だ、全く世間の人には敵はぬ

店一杯に列べられたミシン機は何臺あるか數へ切れぬ位だ、之れが譯なく賣れて行くのであるから家庭の時間經濟を尊ぶやうにあつた事が好く分る、一枚の着物を縫ふと二日も三日も費やさなければならぬ時は夢のやうに過ぎ、今日ではミシンと云ふ調法を器械

に依つて他愛なく縫ふ事が出来る、裸體で過せぬ人類の幸福と云ふ事を思はず居られあ
かつた

火鉢のアイロンを取つて湯沸を掛ける、その時記者は辭さうとすれば「今茶を淹れま
す」と君は云ふ、恁麼事云つた言はんたつてどう斯うかいが矢張り應對の妙は此處ら邊り
にもある

大正十年四月七日印刷
大正十年四月十日發行

各人應對振り

定價金五拾錢

著者 長岡市山本町
發行人 兼 長橋才知郎

印刷人 全 市上中島町二十八番地
山崎正壽郎

印刷所 全 市南觀光院町
長岡日報

發行所 全 市山本町
無窮社

1871
647